
吉田家長男の幸せ

花咲春奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吉田家長男の幸せ

【Nコード】

N5781V

【作者名】

花咲春奈

【あらすじ】

“嫌いなやつがいる”

同じ会社でしかも上司である堤課長だ。

いつも席を外しては喫煙室で女の子達とイチャイチャして仕事
を一人でしてる姿を見た事がない！でも同じ仕事のプロジェクトメ
ンバーに指名されてしまって毎日仕事に大忙し（泣）

そんな堤課長にある日いきなり口説かれその場でキスされてしまっ
て！？

プロローグ

十人十色という言葉がある様に、この世の中には色々な人間がいるわけ。

小さい頃学校では「皆と仲良く」なんて言われていたけれど、正直な所嫌いな相手の一人や二人必ずいたはずだ。だから喧嘩や度が過ぎるとイジメなんてものに発展してしまう。

けれども歳を重ねるにつれて、社会に出る為にはどんなに嫌いなやつでも顔には出さず、上手く付き合っていくのが大人ってやつだと俺は思っていた。

けれど………。

天国にいる父さん、母さん。

本当に嫌いなやつに出会ってしまいましたー

1 嫌いな上司

「各チームリーダーは今回議題に挙がった内容を検討して頂き次回までに回答して下さい。以上で全体会議を終了します。」

時刻は午後3時。会議に参加していた40人弱の人間が次々と席を立ち上がり、人で密集していた会議室から出て行く。

俺吉田光はそれを見送りながらホッと安堵した。

今日も何とか無事に終わった。でも作業遅れてる事は変わらないし、もう少しテスト人員を増やしてもらえるか交渉しようかな・・・。

無事に会議が終わったのはいいがまた新たな課題が増えた。システム会社に勤めて早3年、今年で25歳になる。まだまだ未熟な俺がベテランの先輩達を取りまとめ、会議を進行する事にも少しずつ慣れてきてやりがいを感じている毎日。

俺が任されている仕事は今度実施される法律の変更に合わせて銀行の大規模なシステム変更プロジェクトの事務局だ。要は各チームに仕事の進み具合や問題点を取りまとめる進行係。本来ならこの仕事はもつと経験を積んだ人が指名されるんだけど、ある人物に半ば強引に指名をされて現在に至っている。

「吉田、今日の全チームのテスト不具合資料と議事録いつまでに持ってこれるんだ？」

オーダーメイドのブラックストライプのスーツにグレイのシャツを身に纏い、スリムタイプのネクタイをシルバーのピンで留めた長身の男に光は呼び止められる。椅子に座って足を組みかえる男のその姿にまだ残っていた女性社員の目が留まる。

「はい、7時迄にまとめて堤課長にお渡し出来ます。」
「あー、俺その時間メシ食いに行くから6時に出来ねえの?」

呑気にお茶をのみながら再度男は問いかける。

「分かりました、6時ですね。それまでに終わらせます。」

「おう、よろしく。あと吉田!」

「はい?」

「お前何でいつもしかめっ面して会議の進行してんだ?」

「え……」

「そんな顔してつとキレイな顔が台無しだせ?ヒ・カ・ルちゃん?」

男はハハツと軽く笑うといつの間にか集まってきた女性の取り巻きを連れて会議室から出て行った。

……。

何なんだよあいつ!ムカつく!ムカつく!ムカつく!何が「ヒ・カ・ルちゃん?」だ!あの女つたらしめ!

暴言を吐いたアイツ、堤和明。若干33歳にして課長の肩書きを持ちこのプロジェクトのマネージャー(最高責任者)をしている。そして何より俺を強引に事務局に指名した張本人。周囲からは仕事も出来るし部下からの信頼も厚い、それにあの高身長とキリッとした眉と芯の強そうな瞳で女性からの指示もバツグンの文句無しの内1モテる男……らしい。

でも俺は認めない!あんな軽いやつ!それに俺はあの人と仕事してるけどまともに自分の席に着いて仕事してる姿を見た事ないぞ!絶対皆騙されてるって!

そんな悪態をつきながら会議室の片付けをしていると聞き慣れた

優しい声に呼び止められ光は振り向いた。

「平野代理！」

中肉中背で白髪混じりの容姿をしているが優しい瞳と少しおっとりとした声に癒される。平野代理はこのプロジェクトのサブマネージャー（副責任者）であり俺の事をいつも子供の様に見守ってくれる（実際に俺と同じ年位の息子さんがいるらしい）父親的な存在だ。

「お疲れ様。とりあえず今の所大きなバクは見つかってなくて良かったね。」

「はい、でもシステムテストをする人員が他のプロジェクトの助っ人に行ってしまうので作業が大幅に遅れてしまわないか心配です。」

「そうだね、これ以上遅れるとシステム入れ替えに間に合わなくなるからね。後で堤課長に私から何とかならないか相談してみるよ。」

「本当ですか？ありがとうございます。」

満面の笑みで答える俺を見て平野代理は不思議そうな顔をする。

「吉田君はまだ堤課長に慣れないのかな？」

「え？」

「いつも課長と話している時難しい顔してるよ？」

俺のマネなのか代理は眉間にシワを寄せて俺に問いかける。

「あー、やってしまった・・・。そんな顔して課長とさっき話してたんだ。気をつけていたのに失敗した！」

誤魔化す様に苦笑いをする俺を仕方ないなあと言いながら代理は話を続ける。

「一度一緒にお酒でも飲みに行つて親睦を深めてきたら？」

「はい・・・検討してみます。御心配おかけしてすみません。」

シヨボンと項垂れる光を見て平野は頑張れとボンと光の肩を叩いて会議室を出て行つた。

飲みに行くつたつて大体課長はいつもいろんな部署の女の子に囲まれてるから話しかけにくいし。夜はいつの間にか帰宅して捕まらないし。

・・・大体何で嫌いな男の事でこんなに悩んでんだ俺。

やめだやめっ？平野代理には悪いけど堤課長とは仕事だけのお付き合いでプライベート返仲良くしたくないし。それにプライベートは他に時間を使いたいし！

一人唸りながら壁掛けの時計を見上げると会議終了から30分が過ぎていた。

「あー？時間ロス！」

慌てて会議室を出て自分のデスクへと急ぐ。

定時上がりとか・・・たまにはしたいな（泣）

2 課長の逆襲

『光、どんなに追い込まれても自分を見失ってはだめだよ。諦めな
いでやり遂げなさい。きつと自分の力になるから。』

? 天国の父さんが今の会社の内定が決まった時に俺にかけてくれた
言葉。

・・・父さん、俺は今日も頑張ってるよ（苦笑）

? まとめ上げた資料と議事録のチェックを終え、達成感で胸が熱く
なる。よし？完璧？約束の6時まであと8分？

「堤課長終わ・・・え？」

? いない・・・さっきまで隣で電話してたのに！

? 電話の相手が課長の取り巻きの子だったから長くなると思って油
断してた！

? 課長は期限に煩い。例えそれがちょっとした資料であったとしても
だ。しかも課長の机に資料を提出する事や、メールだけでのやり
取りが嫌いで本人に直接提出するか、メールの場合は送信後課長に
報告するのがルールになっている。いつもはあんなにヘラヘラして
軽いのに期限にだけは厳しくて有名なのだ。

「すみません！堤課長の行き先分かる人いますか？」

「あー、課長ならこの時間アレじゃない？」

？課長の向かい側の席の平野代理が握っていたペンを人差し指と中指で持ちそれを自分の口元に近づけ煙草を吸う素振りをしてみせる。

「分かりました、ありがとうございます！」

？俺は資料と議事録を慌ててプリントし、急いで6階から喫煙ルームがある5階へと階段を駆け下りる。目的の部屋の前に着くと深く深呼吸をしてドアノブを回した。

「お、来たな。」

？課長は相手が俺だと予想していたかの様にニヤニヤと笑いながらタバコを吸っていた。

「各チームの不具合内容の資料と今日の議事録です。」

「時間ギリギリだったな」

「堤課長が自分のデスクにいて下さったらもう少し余裕を持って提出が出来ました。さっきまで電話してたのにいきなりいなくならないで下さい。」

？課長はさっきよりもニヤニヤと、煙草を天井に吹かしながら俺に言った。

「なあーんか急に吸いたくなってね。」

？・・・この人ワザとここにきたんじゃないか？

課長に対して軽く殺意を覚える。本当この人嫌いだ？

？「それでは私はこれで失礼します」

？これ以上課長に関わりたくなくて軽く会釈し、扉を目指した。

「吉田、テスト人員もう少し増やしたいんだって？」

「え？」

「ここに来る前平野代理から聞いた。お前そう思ってたんなら何で最初に俺に言わなかった？」

？背中から聞こえる急にイラついた声に煙と同時に吐く課長のため息。いつもの課長とは明らかに違う態度。

？俺は恐る恐る後ろを振り向く。

？・・・か、顔合わせずらい。

？というか何でそこまで機嫌が悪くなるのかが分からない。責任者の課長の耳に入れる前に事前に平野代理に相談したっていいじゃないか。

「お前な、このプロジェクトの決裁権は全部俺にあんだよ。平野代理が全部責任取れるわけじゃねえだろ。」

「あ・・・。」

「それに特に事務局は全体の流れを把握する仕事だろ？他のチームならまだしも、お前は何かあったら直ぐに報告しろ。」

？そう言つと課長は、もう一本煙草に火をつけ始めた。

？課長の言い分は最もだ。確かに苦手意識が強くて一番に相談しなくてはいけない人を避けてしまっていた。

？

「申し訳ありませんでした。以後気をつけます。」

？俺は反省し、今度はちゃんと課長と向き合い頭を下げた。

「お前、これペナルティな？」

？課長は急にニコニコしだして俺に言った。

「は？」

「は？じゃねーよ。謝れば済むで許されるのは義務教育迄なんだよ。」

「そんな！減給とかですか？」

「そんな小せえ事しねえよ。そうだな・・・今度総務の子にメシ誘われてるんだけどお前一緒に来い。」

「お断りします。」

「うわっ、即答だな。」

「当たり前です。総務の子達は皆課長目当てじゃないですか！何でそんな所に行かないと行けないんですか！」

？全く？人が真剣に反省して謝った途端にこれだもんな！

？課長は煙草の煙を吐きなが考え込み、それを灰皿に潰しながら言った。

「じゃあ2人でメシ行こ？」

「え？」

？グイッと課長に腕を掴まれ引き寄せられる。目の前には課長の社章のピン、そして愛用している香水の匂いがいつもより濃く感じる。

「・・・」

？こ、これは一体何なんだろう？

？腰にはいつの間にか課長の手が回っていてもう一方の手で俺の腕

を掴んで離さない。

「キレイっつーより可愛いね、お前。」

「え？んうッ？」

？唇が暖かく柔らかい感触に包まれる。それは角度を変えそして一度離れたかと思うと再度触れる。その繰り返しをしていくにつれ、やつと堤課長にキスされていると気づく。

「っな？かちよっ・・・ヤメっ」

「吉田、もつと口開ける。舌入れらんないって。」

「ッなんっで！・・・っそんな！んアッ！」

？お仕置き、とばかりに下唇を甘噛みされ、ビックリして俺の口が開いたのを課長は見逃さなかった。

生暖かい舌がヌルツと口腔にゆっくりと入ってくる。

課長が今まで吸っていた煙草の味がして苦い。

舌は俺の歯列をなぞり、舌が絡まり合う。

口づけを受けながら何も考えられなくなっている俺に課長は機嫌の良さそうな声で話しかけた。

「お前さ、俺と付き合わない？」

「・・・っふえ？」

「・・・やべ、可愛い。」

？課長はチュツと俺のこめかみにキスをした。

？何でっ？何でこんな事になってんの？俺さっきまであの人に怒られてたよね？どーしてこんなキスとかすんの？何で課長が俺に？

「やめて下さい？何の嫌がらせですか？」

？俺は課長の腕を振りほどいてドアの近くまで逃げるよう離れたが、しかし課長はズンズンと近づいてくる。

「吉田、涙目になってるよ。」

「？」

「とにかくさ、一度付き合わないかって。俺今フリーだし、吉田なら可愛いし全然イケるわ。」

「な、な？嘘言わないで下さい？堤課長いつも取り巻きの女の子達に囲まれてるじゃないですか？それに俺は男ですっ？」

「だからー、吉田ならイケるって言ってるんだろ。男と付き合うなんて最近じゃ珍しい話じゃないって。」

「・・・」

「それに社内の女には興味ねえんだよ。一回あいつらの目、ちゃんと見てみる。玉の輿って書いてんだから。俺はあの中の誰にも手出した事なんてないんだよ。」

「嘘？」

「本当。それより返事はどうなの？」

「・・・」

「ま、ゆっくり考えてみてよ。俺もじっくり落とすにいくからさ。じゃ、俺そろそろ行くわ。」

？今聞いた言葉が信じられなくてその場に立ち尽くしていると、課長は俺の横にある扉のドアノブを握り部屋から出て行くこととした・・・が、もう一度振り向く。

「あ、ペナルティ回収しとくわ。」

?カリッ

「!!!!!!!!!!」

?微かな痛みを左耳に感じた。

「ご馳走? 残業頑張れよ。」

?そう言い残し、課長は何食わぬ顔をして姿を消した。

?俺は噛まれた耳に手を当て、次に唇に触る。

?天国にいる父さん、母さん。

?今日、誰にも言えない秘密が出来ました。

?会社って怖いです(大泣)

3 最愛の弟

「光兄ちゃんお帰り!!」

玄関の扉を開けるとお日様みたいな明るい笑顔に出迎えられた。少し茶色がかった色素の薄い猫っ毛な髪と、今にも零れ落ちそうなほどの大きな瞳。165センチの俺より20センチほど小さい小柄な体に、真っ白な八重歯が見える愛くるしい笑顔。俺の最愛の弟にしてたった一人の家族である吉田優。

「ただいま、優。留守中何もなかった？」

「うん。今日は少し早かったね」

言えない・・・上司で、しかも男にキスされて仕事に集中出来なかったから早く帰って来たなんて。引きつった顔で俺は答える。

「ああ、たまには優とゆつくりとメシ食べたくてさ。」

「本当!?じゃあ早く食べよ!今日はハンバーグなんだよ。」

「ちよっと待ってて。すぐ着替えてくるから。」

クシャッと優の頭を撫でて2階の自室へと階段を上る。

俺達兄弟は3年前、俺が22歳優が8歳の時に両親を亡くした。けれど当時俺は今の会社から内定を貰っていたし、両親が残してくれたこの一軒家とそれなりの遺産もあって、俺は優と2人で生きていく事を決めた。始めの頃は家事全般をした事もないのに、育児しながら会社で働く生活は大変だった。それを見かねた優が家事をしてくれる様になり(しかも俺より出来る)仕事に専念する様になつて現在に至る。

急いで着替えを終え1階のリビングに行くと、そこにはハンバーグや付け合せのマッシュポテトや野菜等が綺麗に盛り付けられた夕飯が既に準備されていた。

「さ、食べよ。僕もうお腹ペコペコだよ。」

二人でグラスを持ち乾杯をし料理を食べ始める。そして優と今日学校であった事、友達の事や他愛の無い事を話す。

大事な弟の成長を傍で見守り続けていく事、これが俺の幸せ。

「・・・光兄ちゃん聞いてる？」

「え？ごめん、何の話だっけ？」

「もう、ちゃんと聞いてよ。今ね学年対抗ドッジボールの練習してんの。」

「それ兄ちゃんもやった事あるぞ！確か下克上ドッジと呼ばれてるやつだろ？」

「そうそう！やっぱり光兄ちゃんの頃から下克上って呼ばれてたんだ！！」

優が通っている小学校（俺の母校）で毎年実施される「学年クラス別対抗ドッジボール大会」通称「下克上ドッジ」。ルールは普通のドッジボールと同じで低学年部門、中学年部門、高学年部門のクラス対抗で実施される。

「僕今年下克上生なんだよ！」

「あー、なるほどね・・・。」

「下克上生」とは、その名の通り格下の5年生が最上級生である6年生をドッジボールで打ち負かし、下克上する学年のことを意味す

る。まあこれは低、中学年の部である1年生、3年生にも当てはまるんだけど、やっぱり一番盛り上がるし見ごたえがあるのは5年生なのだ。もし6年生が5年生に負けたとなると、最上級生のプライドが傷つき下手すると卒業まで引きずってしまう事もある恐ろしい大会なのだ。

「僕のクラス凄くチームワークが良いんだよ！この間の体育で6年1組と練習試合したんだけど勝ったの！」

「凄いな！それじゃ優勝狙えるな！」

「うん！僕頑張る！……でも……。」

「どうした？」

さつきまで生き生きとしていた優の顔が曇る。

「その練習試合した後からクラスの子が何人か6年生にいやがらせされてるみたいで……。」

「え！？」

「そんなたいした事じゃないからまだいいんだけど。」

「例えば？」

「んー、下駄箱の靴が隣の下駄箱に移動してあったり、放課後僕たちが練習してるコートを大声出しながら横切って6年生が下校したり？」

「……結構幼稚じゃね？」

「うん……。」

「ま、一応気をつけとけよ。大会が終わる迄の辛抱だよ。」

「そうだね。ねえ、光兄ちゃんのお会社とかでは意地悪する人とかいるの？」

「え？……。」

堤課長の顔が脳裏によぎる。喫煙室で自分の唇を奪ったあの熱い

唇と口腔を舌で掻き回された事。

課長の舌が自分の舌と絡まる度にクチュっつと卑猥な音がしていた事。

.....

「い、いるわけないだろ！！皆大人なんだから！」

「そっくだよね、今会社で意地悪する人はパワハラになるもんねー。

あ、ご馳走様でしたー。」

優は笑いながら食べ終わった皿を流し台へと運ぶ。そんな背中を見つめ心の中でつぶやいた。

・・・優、兄ちゃんの会社パワハラする人はいなくても、セクハラする上司はいたぞ。

俺は食べかけのハンバーグに殺意を込めてナイフを刺した。
もちろん課長の事を思い出しながら。

4 「鉄壁の笑顔」で挑む!!!

? 東京都新宿区西新宿

? 丸ノ内線の西新宿駅から徒歩5分。30階建てのオフィスビル。

? ?

? この場所が俺の勤務先、そして戦場でもある。

「堤課長おはようございます。これ、今日の会議で協力会社に配布する資料です。」

? 俺はニコツと眩しいほどの笑顔で資料を渡す。課長は眠そうにしていた目を見開き、驚いた表情をしながらそれを受け取る。

「それからこの会議の場所なんですけれど、17階から20階の会議室に変更になりました。関係者にはメールで連絡済みです。」

「ああ、分かった。」

「よろしく願います。」

? 最後にもう一度課長に微笑み、自分の席へと戻る。

?

? 背中に課長の視線を感じる。

?

? 昨日の課長のキスから1日。俺はショックと悔しさと驚きと、その他色んな感情が混ざって眠れない夜を過ごした。

? そしてたどり着いた結論。

【抹消しよう。】

? そう、何もなかった！昨日は課長に資料を渡しに行っただけ！それだけ！俺は何もされなかったし何も覚えていない！！

? 課長に何を言われ様とも全部俺の「鉄壁の笑顔」で返してやるよ！

? とりあえずさっきのは上手くいったみたいだ。俺は自席の机の下でこぶしを握り、小さくガツポーズをした。そして引き出しからスケジュール帳を出し、今日のタイムスケジュールを確認する。

? しばらく仕事をしていると、俺の机に大きな影が出来ている事に気がついた。

「光。」

「え？あ、はい！」

? そこにはまだ気怠そうにアクビをした課長がいた。

「これ昨日提出してもらった議事録のチェックしたやつ。」

「ありがとうございます。（名前で呼ぶなよコノヤロー！！！！）」

? 俺は議事録を受け取る。もちろん「鉄壁の笑顔」は崩れてはいない。

「光、後ろの襟少し出てんぞ。」

? 課長はYシャツの崩れに気づくと、俺を椅子に座らせ背後に回り込み丁寧に直してくれる。
?

?

?今もまだ覚えてるー

?課長のシトラス系の爽やかな香水。抱きしめられるとタバコの煙と混ざるクセのある、でも嫌じゃない、何とも切ない気持ちになったあの感じ。

?そしてキスが深くなる度、抱きしめる力が強くなっていった事。

『吉田、もっと口開ける。舌入れらんないって。』

?.....!!!

?体が一瞬にして熱くなるのを感じた。きっと茹でダコみたいに顔が赤くなってると思う。俺は椅子から立ち上がり、回れ右して課長と向きあった。

「ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

?それだけ言うと、俺は机に向かい仕事の続きに取りかかるようにした。「鉄壁の笑顔」は・・・何とか保てる。

?だが、机には俺の手よりもガツシリとした大きな手が、資料の上に乗っかっていて仕事が出来ない。

「.....顔真っ赤。」

「!?!?」

「昨日のアレ、思い出した？」

「つ、堤課長、私にはよく分かりませんが・・・。」

？俺にしか聞こえない様に耳元に唇を近づけ、甘く響くバリトン声は言った。

「光の舌、甘かった。」

「ヒッ!？」

？俺は堪らず机に突っ伏した！

？もう嫌だこの課長！何考えてんだよっ！これ完全にセクハラだろ！？

？課長は俺の反応がツボにハマったのか、一人でゲラゲラ笑っている。

「朝から元気ですね。」

？平野代理は俺達を見てクスクスと笑っている。

「平野代理見てたんですか!？」

「途中からですけどね。しかし、昨日の今日でそんなに親睦が深まるとは驚きです。課長、吉田君と飲みにも行かれたんですか？」

？平野代理は嬉しそうに課長に質問する。

「いいえ。昨日の夕方喫煙ルームでちょっとプライベートな話をしていたら気が合う事が分かりましてね。」

「そうだったんですか。」

「あ、でも親睦をもつと深めたいと思ひまして、今昼飯に誘つていたんですよ。な、光？」

「えっ!？」

「それはいいですね!是非行つてきて下さい。ね、吉田くん。」

「・・・あ、はい。」

「光、昼休みなつたら席にいる。迎えに行くから。」

?課長は言い終わると、鼻歌交じりで部屋から出て行つた。

?や、やられた・・・。

?こうして俺はまんまと課長のペースに乗せられ、ランチの約束までさせられてしまいました。

? 俺の「鉄壁の笑顔」は全く通用しなかつたのです・・・

5 二人でご飯。

「昼休みです！」

? 野太い男らしい声がフロア全体に響く。

? うちの会社は、事務職の人間が学校のチャイム代わりに声をかけ、昼休みの合図をしてくれる。理由は俺達エンジニアやその他技術者達は集中すると周りが見えなくなり、完全に自分の世界に入ってしまうからだ。実は俺もその内の1人で誰かが声をかけてくれないとそのままノンストップで仕事を続けてしまい、何回か昼メシを食いつぶぐれてしまった事がある。そんな訳で、この昼休みの合図は凄くありがたいものなんだ。

? そつ。

? いつもならね。

?

? 今日(今日は)地獄へのカウントダウンにしか聞こえなかった。(声掛けの人ごめんなさい)

「光、行くぞ。」

? 課長は俺を見つけると顎で入口を指し、早くしろと急かした。エレベーターに乗り込むと、先に乗っていた課長の取り巻きの女の子3人と遭遇した。

「あゝ課長、お疲れ様です？」

「課長も外でランチですか？奇遇ですねえ？」
「課長は今日何食べるんですか？」

？次々に飛び交う黄色い声。フワフワした柔らかそうな髪の毛にピンクをベースにした可愛いメイク、まつ毛はフサフサで瞬きする度に大きな瞳が潤んだ様に見える。その中に見覚えのある顔、俺と同期の杉山さんがいた。

「あ、吉田君！お疲れ様。課長と一緒にランチ？」

「うん、そんなとこ。」

「珍しい組み合わせだね、ちょっとビックリしちゃった？」

？コロコロと笑う明るい笑顔。彼女はうちの会社の総務の子で、同期の中でも可愛いと評判の子だ。

「そうそう、来月同期会やろうと思ってただけど吉田君どうかな？」

「同期会？」

「そう、同期何人が集まって近況報告？しながら飲むだけなんだけどね。」

「いつやるの？」

「来月25日の金曜日だよ。」

「あー、ごめん、杉山。光はその日俺と協力会社の接待だわ。」

「え？」

？そんな話今聞いたぞ！？
？何言ってるんだこの人！？

「そうなんですかあ。営業の由美と吉田君来てくれたらいいねって思ってたんですけど、残念です。」

「本当ごめんな、お詫びに今度俺で良ければ昼飯奢らせて？」
「え！本当ですか？嬉しいですか??？」

？課長の言葉に杉山さんはさっき迄俺と話していた事なんか忘れて、視線を課長に向ける。

「課長、杉山さんばかりズルいです！あたしも連れてって下さい？」

「あたしも？」

「分かった分かった。今度な。」

？エレベーターが1階に到着し、女の子達と別れると、俺はスタスタと課長の先を歩く。

「光、何怒ってたんだよ。」

「。。。。。」

「おい、感じ悪いぞ光！」

「来月接待があるって俺始めて聞きましたけど？」

「あゝ、あるかもな。なくても光は俺とデートな？」

「やっぱり嘘だったんですね！？酷いです！」

「酷くねーよ。俺の目の前で他の女と飲みの約束してたお前が悪い。」

「はあ！？課長だつて俺の目の前で杉山さんを昼メシに誘ってたじゃないですか!？」

「何？ヤキモチか？」

「違います！」

「俺はいいんだよ。」

「何ですか！」

「俺のはヤキモチだから。」

「!??」

「ほら、時間ないんだから行くぞ。」

？思いがけない言葉を聞いて立ち止まった俺に課長はニヤリと微笑んだ。

「じゃあサバの味噌煮定食2つね。」

？課長の注文を聞き終えた店員が席を立つ。

？俺達は会社から徒歩1分程のファミレスの脇にある階段を下りた先の小さな居酒屋に入った。

「こんなお店があるなんて知らなかったです。」

「ここは基本的には居酒屋なんだけど、昼の時間は定食メニューもあるんだよ。あ、会社の奴等には教えんなよ。」

「え？うちの会社の子達とは来ないんですか？」

「ここはお気に入りなの。俺昼メシは1人派だし。」

「え！？そうなんですか!？」

「ああ。昼メシ位誰の目も気にしないでゆっくり食いたいし、コイツも吸いたいしな。」

？課長は自分の内ポケットからタバコを取り出してライターに火をつける。

？意外だ・・・昼休みはいつも見かけないからてつきり取り巻きの子達と一緒にいるんだと思ってた。でも確かにここは女の子達と来るにはちよっと寂しいかもしれぬ。

？少し古びた木造の店内だが、手入れが行き届いているので汚い感じはしない。店の暖簾をくぐると、目の前に4人掛けのテーブルがあり奥の座敷には掘りごたつ式の席がいくつか用意されてある。？俺達は掘りごたつの席に座り、周りを見渡すと棚には客が手書きで名前を書いたであろう日本酒等々の一升瓶が所狭しと並んでいる。

「お客さんも結構入ってるんですね。」

「ああ、飯も上手いから夜飲みに来てるやつが昼もここに来るんだよ。光、次は夜に来ような？」

「いえ、遠慮します。あと・・・前から言おうと思ってたんですけど、その名前で呼ぶのやめてくれませんか？」

「は？いいじゃん、光で。可愛いし。」

「可愛いとかの問題じゃなくてですね・・・。」

「じゃあ光も俺の事名前で呼べよ。あ、一応俺上司だからプライベートルドでだけな？」

？嬉しそうにタバコの煙を吐きながら課長は言う。

？誰が名前でなんて呼ぶかよ！俺が言ってる言葉を自分で良い様に全部解釈すんな！

？そんな話をしている間に注文したサバの味噌煮定食がきて、とりあえず飯を食べる事にする。課長の言っていた通り料理はどれも美味しくて、俺のお腹を満たしてくれた。

「そういえばさ、光は何でうちの会社に入ろうと思ったんだ？」

「そうですね、俺元々エンジニアになりたかったので就活はシステム会社ばかり受けて・・・1番始めに内定を貰ったからからですね。」

「それはまた・・・随分と男らしいな。」

「あ、調度その頃両親も他界して、長期間就活してる場合じゃなくなつたのも理由の1つですけど。」

「……………」

「でもこの会社に入って良かったって思ってますよ。仕事は辛いですけどやりがいがありますし、平野代理や周りの皆も優しい人ばかりですし……………」

「おい、何で平野代理の名前が始めに出てくんだよ。まず俺の名前だろ？」

「そうですね、すっかり忘れてました。(ニコニコ)」

「お前本当にいい性格してるよな？入社後の面談で見た時は思ってもみなかったよ。」

「え？あの時課長いらっしゃったんですか？」

「入社後に行われた部署説明と新入社員に希望配属部署を聞く入社面談。課長位目立つ容姿をした人なら絶対覚えてるはずなんだけど……………」

「俺は面談参加してないけど鏡から見た。」

「鏡？」

「あれ？お前知らないの？面談した会議室のデカイ鏡あるだろ？あれマジックミラーなんだよ。」

「え！？し、知らないです！」

「初耳だ！そんな物が付いてるなんて！？まあ、変な事した覚えはないから別にいいけど…………何か監視されてるみたいで嫌だ……………」

「ま、いたのは俺だけなんだけどな。」

「課長だけ？」

「ああ、ちょっと隣の部屋で仮眠を取ってたらいきなり新卒の面談

が始まってな。」

「それただのサボりじゃ……。」

「そこで妙に線が細くてキレイな顔したやつがいると思っただら光だっただよな。」

「……。」

「それで部長に履歴書見せて貰ったらお前身内が弟だけだったろ？生活かかってるヤツの方が仕事の飲み込みも早いし、必死に食らいついて来ると思って部長に頼んで俺の所の配属にしてもらったんだよ。で、やっぱり光は俺の思った通り、どんな仕事も投げ出さない、良い人材だったって訳。」

「課長……。」

「俺の事そんな風に思ってくれてたなんて……。確かに入社した頃は俺が優を守る為に仕事して、家計を支えなきゃって頭が一杯だった。だからどんな仕事も全部やってきた。」

「そんな俺の事少しは見てくれてたのかな？」

「俺は何だか照れてしまっでご飯の入った茶碗を持ったまま固まり、俯いてしまっ。」

「おかげで俺もゆっくりタバコが吸えるしな？」

「か、課長は休憩し過ぎです！」

「……調子狂っ。」

「今迄嫌いだった人にそんな事言われると……何か、変な感じ。」

「そんなわけでこれからもよろしくな、光。」

「!？」

「課長はそう言うつと、掘りごたつに座って足を組んでいた片足を目」

の前にいる俺の足首から膝下までスツと上になぞった。

「?こ、この人はー!!!!」

「課長、セクハラはやめて下さい。」

「は?何言ってるの?足組み替えようとしたら光の足に当たっただけだろ?」

「!」

「光、自意識過剰なんじゃない?」

「!!!!!!!」

「ま、そんな所も俺は好きだけど?」

.....

「?少しでも課長の事見直した俺がバカだった!!!!!!」

『やっぱり課長は嫌いだ!』

6 弟からの提案。

『ま、ゆっくり考えてみてよ。俺もじっくり落とすにいくからさ。』

? その言葉通り、課長は本当にしつこく俺を構う様になった。

? 昼メシもあれ以来毎回打ち合わせと称して付き合わせるし、夜の残業中には2人つきりになるとやたらとボディタッチが増える。そして何故か俺と課長が「親友の様に仲が良い」何て言う噂まで広まっているらしい。

?

? しかし本気なのか冗談なのか? 正直俺には分からない。

? だつて・・・

「課長、先日京都に旅行に行ってきたお土産です?」

「あ、ハツ橋。俺これ好きなんだよ。」

「良かったです? 喫煙ルームで食べませんか?」

「いいね、行こつか。」

? 相変わらずこんな調子で女の子が話し掛ける度に離席して何処かへ行ってしまふ始末。

?

? 何が「俺と付き合わない?」だ! 課長の嘘つき! 他の女の子が良
いならキスなんかすんなよ!!

.....

.....アレ?

・・・アレレ？

？まさか、ね。

？そんな事ないじゃん。

？気のせいだって・・・

「そう！兄ちゃんの机の上・・・あつた？良かったー。優、悪いんだけどその封筒会社に持ってきてくれない？・・・うん、ありがとう。メールで会社までの地図送るから。着いたら受付のお姉さんに名前言うんだよ？・・・うん、じゃあね。」

？俺は電話を切るとホッと安堵のため息をこぼす。

「吉田君、どうしたんだい？」

「平野代理。いえ、昨日家で夕方からやる会議の資料を作成していたんですけどそれを忘れてしまいました・・・。」

「吉田にしては珍しいね。」

「すみません、でも弟が夏休み中だったのでこれから届けにきてくれる事になりました。」

「それは良かった。それにしても吉田君の弟か・・・何歳だっけ？」

「11歳で小学5年生です。」

「君に似て、可愛いんだろうね。」

「いえ、そんな事・・・！？」

・・・

？優が会社に来るって事は！？

？俺は思わず辺りを見渡し課長の存在を確かめる。

？あの人にだけは優を会わせたくない。いや、阻止してみせる！

？優を課長の毒牙から守ってみせる！

？立ち上がり、課長の席を見つけるも姿は見えない。社員の行き先表示ボードには外出中と記入されている。よし、このまま優が届けに来るまで帰って来るなよ。

？時刻は午前10時。優が会社に来るまで約1時間。

？俺はハラハラしながら到着を待った。

「吉田さん、1階受付に弟さんがお見えです。」

？俺宛に内線連絡が入ると、俺は素早く立ち上がり優が待つ受付へと急いだ。

「光兄ちゃんこっちこっち！」

？小柄な身体で両手を大きく振り、自分の居場所を優が知らせる。

「わざわざゴメンな、ゆ・・・う!？」

「全く、可愛い弟にこんな炎天下の中荷物を届けさせるなんて。困った兄ちゃんだな？」

「そんな事ないよ。僕兄ちゃんの会社に前から来てみたかったから嬉しい！」

「優は本当に兄ちゃん思いだな。」

「ええー、そうかなあ？」

「ああ、優は兄ちゃん思いで優しいよ。」

？受付の隣にある来客用のソファーに、優と1番警戒していたはずの課長が2人で仲良く話をしている。

「・・・何でうちの優と一緒にいるんですか？」

「外で打ち合わせした帰りに駅前で妙にウロウロした小学生がいてさ、どうしたんだって声かけたら迷子になったって涙目で言われて・

・・・

「ま、迷子じゃないよ！どこにいるか分かんなくなっただけだよー
！」

「それを迷子って言うんだよ。とにかく行き先聞いたらうちの会社
だっって言つから連れてきた。」

「ああ、そうですか。」

？思わぬ誤算で顔が引きつる。

「でも会社に着いて受付で光の弟だっって聞いた時にはビックリした
よ。」

「僕も堤さんが兄ちゃんの会社の上司さんて聞いてビックリしちゃ
った。改めて弟の吉田優、小学5年生です。兄がいつもお世話にな
っています。」

？優はペコツとお辞儀をする。

「おお、出来た弟だ。」

「堤課長、うちの優をわざわざありがとうございます。優も本当
にありがとうな。兄ちゃん凄く助かった。」

「うん！仕事頑張つてね。僕もう行くから。」

「ああ、帰り道気をつけるんだぞ。」

「はい、ストップ。」

優から封筒を受け取り、入り口まで見送ろうとすると課長に呼び止められた。

「光、優が持つて来た資料は俺達が使っちゃつか？」

「はい、午後の会議で使う資料です。」

「そうか。優、暑かつたる？冷たいもんでも食いに行くか？」

「本当！？じゃあ僕アイスがのつてるパフェがいいな！！！」

「じゃあそのファミレスでいいか？」

「やったー！！！」

「ちよつと課長！席に戻らずにいいんですか？」

「いいんだよ。まずは俺達の使う資料を届けてくれた優にお礼をするのが先だ。ついでにちよつと早いけど光もメシ食おうぜ。」

？課長と光は楽しそうに外へと歩き始める。仕方なく俺も2人の後を追いかけてファミレスへと向かった。

？それにしても優、お前食い意地張り過ぎだよ・・・

？ピンポンと店員を呼ぶ音、家族連れ賑やかな声、食器の重なる音。ファミレスの店内は平日の午前ということもあり、比較的空いていた。

「それにしても堤さんが光兄ちゃんの上司さんだったなんて僕嬉し

「いなっ」

「どうしてだ？」

「だって堤さんみたいにカツコ良くてしつかりした人なら兄ちゃんを会社で守ってくれそうだから！兄ちゃんてばよく変な人にナンパされてるんだもん！」

「ちよつと優！？」

「変な人？」

「そう！この間なんか家のお風呂が壊れて一緒に銭湯いったら、帰りにスーツ来た男の人にいきなり「風呂上がりのうちで一杯どうですか？」とか声掛けられてんの！！知らない人にだよ！？」

「ブツ！！優やめなさいっ！」

？俺は思わず飲みかけのコーヒを吹いてしまう。課長は段々眉間の皺が深くなり、機嫌が悪そうな顔をしていた。

「それ、「一杯どう？」じゃなくて「一発どう？」って意味なんじゃない？」

「一発？？？」

「わーっ！っ！！堤課長！優に下品な事教えないで下さい！！」

「あと夏になると毎年会社帰りにナンパされるし！」

「優！」

「・・・」

「とにかく！光兄ちゃんて、顔が女の人みたいにキレイでしょ？」

「確かに。」

？何！？何！？

？2人揃って俺の顔をジーツと見てくる。

「僕は大事な兄ちゃんをそんなヤツから守りたいの！・・・でも僕じゃ力不足で・・・。」

「そんな事ないよ優！兄ちゃんは優がいてくれるだけで凄く力強いぞっ！」

？何か、いやーな予感・・・

「だから堤さん！光兄ちゃんのボディガードになつて！」

「ボディガード??？」

？優の真剣な表情に課長は目を丸くし、コーヒーを持っていた手が止まる。

「ゆ、優？」

「一緒に電車乗るの付き合つとかでもいいから！兄ちゃん痴漢にも会つて言つし・・・」

「光、本当か？」

「あ、あれは電車が混んでて・・・もしかしたら俺の思い違いかもしれないし！それに俺男だから別に減るもんでもないし・・・」

「減る!!!」

？課長はガンツと机を叩き、ファミレスにいるお客さんが一斉にこちらに振り向き、時が一瞬止まった様になる。

「分かった。俺が出来る限り光を家まで送つてやるよ。」

「堤さんありがとう！」

「課長！？何言ってるんですか！大体俺の家が何処にあるかも知らないじゃないですか！」

「板橋。」

「え？」

「板橋駅の近くだろ？前に履歴書見て知ってる。俺その次の駅だか

ら送ってやるよ。」

？優は目をキラキラさせ、またしてもとんでもない言葉を口にする。

「じゃあうちで一緒に夕飯も食べてってよ！僕こっぴどく見えて料理結構作れるんだから！」

「優！堤課長にも都合があるんだからそんな勝手に……」

「お言葉に甘えてご馳走になるよ。どうせいつも外で食べてるしね。」

「うん！じゃあうちでご飯食べる時は僕の携帯に連絡してね。」

？2人は携帯を取り出し赤外線であつと言う間に連絡先を交換してしまう。

？もう俺の言う事なんてお構いなしだ（泣）

？俺達はファミレスを出ると優を駅迄送りに行った。時刻は昼の12時を過ぎ、真夏の炎天下のアスファルトはどんどん気温が上昇していく。

「じゃあ僕行くね！堤さん、兄ちゃん、ご飯のリクエストあったらメールしてねー！」

？走って改札口を抜けホームへ向かう弟を見送るとドツと肩の力が抜けた。

？ああ……こんなはずじゃなかったのに。

「堤課長、わざわざすみませんでした。見送りまでつき合わせてしまつて。」

「いや、俺は楽しかったよ……羨ましいよ……。」

「？」

「・・・さて、会社に戻るか。」

「はい。」

？課長は少し寂しそうに笑い、会社へと歩き始める。

？俺の前に行く課長の背中がなんだか悲しそうに見えて、妙に気になった。

7 温もり（前書き）

遅くなりました！続きです！

お盆中に書くとか言って約束破りました・・・。

そして今回短いです！す、すいません！

でも次の話はもう半分書いたんであとはエロだけなんです（笑）

そう！エロが気に入らなかつたので今回話を分けました。

多分明後日迄には投稿します、はい。

頑張ります！

それから・・・このお話を読んでくれる方々、そしてお気に入り登録してくれてる方々！ありがとうございます！

皆様のおかげでまだ続いています。

当初お気に入りに誰も登録してくれなかつたらやめようと思っていたので本当に嬉しいです！

最後まで書き終えますので引き続きお付き合いお願いします。

では、良かったら読んでいって下さいね

7 温もり

窓から見える花。

夜の闇の中から赤、黄、青と小さな明かりが集まって大輪の花を咲かせている。

キラキラ光るその輝きは見ていて飽きない。

光は窓から見える街の明かりを見て、少しだけ気分が癒された。

残業は嫌いだ。決められた時間内に仕事をこなす事が出来なかった気がして悔しいし、残業が長引くほど優に寂しい思いをさせてしまっ。

カタカタカタ

パソコンのキーボードを打つ速度が早くなる。

早く終わらせないと。

カタカタカタカタ

カタカッ

入力ミス。

気持ち焦っている証拠だ。

早く、早く終わらせないと。

「光ー！帰んぞー。」

間の抜けた声は、俺の張り詰めていた気持ちをかき消す様に部屋中に響いた。

「課長・・・今日もですか？」

「今日も 俺ボディーガードだし？」

「・・・今終わった所なので5分待って下さい。」

「じゃあ俺1本吸ってくるから帰る準備出来たら迎えに来て？」

「・・・分かりました。」

「逃げんなよ？」

「も、もう逃げませんよ！」

課長はニヤツと意地の悪い笑みをして部屋を後にした。

先日弟の優が課長に俺のボディーガードを依頼してからというもの、課長はそれを口実にほぼ毎日帰宅を共にする様になった。何回か逃げようと試みるも俺の行動パターンは課長にはお見通しらしく裏口からも、警備員専用口からも、または地下の駐車場からもタイミング良く待ち伏せされていて結局いつも捕まってしまった。

で、結論から言うと「諦めて一緒に帰宅」する事にした。毎回逃げるルートを考えるのも面倒だし、何より時間のロスで家に帰る時間が遅くなる。それに課長と帰ると楽なのだ。自分の目の前の席が空いたら俺に譲ってくれるし、混んでる電車内でも俺が人に潰されない様に自分の体を盾にして守ってくれる。もちろん満員電車のどさくさに紛れて俺の体を触ってくるなんて事は全くなかった。

きつと課長はそんなヤツからも俺を守ってくれてるんだと思う。

だから・・・一緒に帰ってやってもいいかなって。
うん、それだけ。

俺はこの煮え切らない気持ちを断ち切るかの様にパソコンのシャ
ットダウンのボタンを押した。

「課長、お待たせしました。」

白い煙がモクモクと立ち込める室内。空気清浄機はあるものの、
まるで役目を果たしていない空気の悪さ。

この部屋、やっぱり苦手。

喫煙ルームに入ると、一番奥の端の壁に体を預けた様にして課長
はタバコを吸っていた。もちろん回りには見慣れた取り巻きが課長
をガツチリ固めている。

「おー。じゃ、行くか。」

課長は俺を見つけるとタバコを灰皿に捨て、鞆を掴む。

「光、家の冷蔵庫にビールある？」

「出勤前に何本か入れてきました。」

「さっすが、グラスは？」

「冷凍庫に入れてます。」

「上出来！」

グシャッと俺の頭を優しく撫でられる。こゝ、これくらい！一応ボ

デイーガードしてもらってるから当たり前前っていうか・・・

「課長は本当に吉田さんと仲が良いですね？」

「羨ましいですよー？毎日ここで待ち合わせしてるんですか？」

「今日はこれから吉田さんのお家に行かれるんですか？」

取り巻きの子達からの次々と質問を浴びせられる。その目はキラキラと光っていた。

「そ。今日は金曜だから光と飲み明かすの。」

「ちょ！飲み明かすなんて聞いてないです！夕飯食べるだけじゃ！」

「あー、はいはい。そういう事にしといてやるよ。じゃ、お先に。」

「お疲れ様でしたー」

黄色い声が室内に響く。取り巻きのお見送りを受けながら俺達は会社を出た。

時刻は午後9時。夜のラッシュだったらしく電車内は人でごった返していた。

人・人・人・人・人

とにかく人が多い。電車が次の駅に着いても皆目的地はまだ先なのか誰も降りる素振りをみせない。しかし乗車してくる人は増える一方。俺達は車両の一番端、車両の接続部の扉の前に立っていた。

「光、大丈夫か？」

「な、なんとか・・・でも手が・・・」

人が多すぎて真っ直ぐ立ってられない。おまけに左腕が伸ばしき

った状態で前のサラリーマンらしき男性の背中にくっついていて元に戻せない。

「あと少しだから我慢できるか？」

「はい。これくらい大した事な……い……」

スツと腰に何者かの手が回る。課長……の手は両手共上のつり革のバーを掴んでいる。

腰に回った手はどんと下に伸びてきた。軽くじゃなく、撫で回すみたいに静かに、ゆっくりと光の尻に向かっていく。

「……ンツ……」

「光？」

「……」

俺は無言で課長の目を見て必死に訴えた。

お願い、気づいて。

目が何だか熱くなってきて、涙が溜まってくのが分かる。

手は休む間もなく尻の割れ目に向かって進んでいく。
がっしりと固く、大きな暖かい手が。

「池袋ー。池袋ー。」

「っクソツ!!! 来い! 光!!!」

丁度次の乗車駅に到着したアナウンスがしたと同時に課長は俺の左手を思い切り引っ張り壁へと移動させる。そして車両と車両の接続部分にある扉を開けると俺を中へ突っ込んだ。次に自分も中へと

入り、さつきまで俺がいた場所に向かって睨むと扉を閉めた。元々ここは人が入る場所じゃないから、2人で入ると結構キツイ。

「わりい……」

「へ？」

何とも間抜けな声が出た。いや、だって課長が謝ったから……

「気持ち悪かったよな、大丈夫か？」

気づいてくれた……。

だからここに？

目の前の課長は凄く心配そうに俺を見て……。悲しそうな、でもしかめっ面で怒っている様な、不思議な顔をしていた。

こんな課長、初めて見た……

「あ、ありがとう……ごさいました……」

ちゃんと課長の目が見れない……。どこ見たらいいのかわかんないし、自然と瞬きも多くなる。拳動不審だ、俺。

「怖かった？」

「べ、別に……怖くなんか……ない……です。」

「……意地っ張り。」

そつと課長の手が俺の左手をギュツと握る。

暖かくて、優しい温もり。

課長の手が小刻みに震えてると思ったら、その手の中にある俺の手が震えていた。

怖かったし、気持ち悪かった。

そついうの全部、課長に見抜かれていたんだ。

ギョッ

俺の手が震える度に課長は握り返してくれる。

握り返してくれる手は俺の手より一回り大きくて、心まで包んでくれてるみたいだ。

「・・・手、繋いでいい？」

「・・・はい。」

次第に気持ちも落ち着いてきて、手の震えも無くなってきた。でもこの手を離したくなくて、俺はわざと震えてるフリをした。すると課長も握り返してくれる。

ギョッ

扉の向こう側の沢山の人の声。電車のアナウンスの声、線路を走る電車の音。

俺は何も聞こえなかった。

感じるのは、課長の手の温もりだけだった。

8 ワインでフワフワ

自宅へ帰ると、玄関一杯にダンボールの山が積まれていた。靴を脱ぐスペースが少しだけ残されていて、後は色んなメーカーのロゴの入った箱、箱、箱。

「何、コレ？」

これでは玄関に大人2人は入れない。いや、俺1人が靴脱ぐのも狭いんじゃないか？

「優ー！これ何ー？？？」

俺はその場で姿の见えない優に呼びかける。

「おかえりなさいー！」

玄関のすぐ横のリビングの扉が開き、ピヨコンと優が顔を出す。

「この荷物どうしたの？」

「これねー、堤さんからのプレゼント？」

「プレゼント？」

俺は後ろで玄関の扉を抑えている課長を見る。

「結構早く届いたな。優のやつも届いたか？」

「うん！全部届いたよ！堤さんありがとう！」

「課長何ですか、これ？」

「光兄ちゃんとりあえず中入って！話はそれから！」

「あ、うん。」

俺は優に急かされながら中に入り、課長も続いてこの狭い玄関で靴を脱ぎリビングへ入る。

「これは俺からのほんのお礼だよ。」

「お礼？」

「ボディーガードって言っても特に何もしてないし、夕飯までご馳走になってるからな。優に何か欲しいもんあるかメールで聞いたんだよ。そしたら、コレ。」

課長は自分の携帯を取り出し俺に画面を見せた。

『お米・醤油・砂糖・塩・みりん・洗剤・トイレットペーパー……』

携帯画面にはまとまりのない単語が画面一杯に綴っていた。

「なんか、持つのが面倒くさいものばっか……」

「あつたりー！堤さんが何でもいいって言ったからスーパーのチラシ見ながら沢山書いちゃった？」

「……」

「俺もまさか調味料や生活用品を要求されるとは思ってなかったよ。で、ネットで見てまとめて届けてもらったんだよ。」

「はあ……」

「あと丁度いいからこれも。」

課長がポンと叩いたダンボールのロゴを見ると、某大手有名酒造メーカーの名前が。

「ビール以外もたまには飲みたくてな。」

ダンボールを開けるとビール、焼酎、日本酒、カクテル、ウイスキー等々沢山の酒がビッシリと入っていた。しかも俺でも知ってる名前の高い酒まで。きっとこのダンボールだけで10万はするんじゃないだろうか。

「とりあえず兄ちゃん達着替えてこの荷物片付けるの手伝って！僕だけじゃ終わらないよー！」

優がダンボールを叩きながら俺達を急かす。

「分かった分かった。優、俺の服どこにある？」

「堤さんの服ならさっきダンボールから発見したよ！ちよっと待ってて！」

優はそう言うとパタパタとリビングから出て行った。

「堤課長、服まで買ったんですか？」

「ああ、ずつとスーツじゃシワになるだろ？」

「でも帰る時また着替えるのも面倒じゃないですか？」

「帰らないよ？」

「え？」

「堤さん、はい。」

優がリビングに戻り、一つの箱を課長に渡し中身を開ける。

「俺今日ここに泊まるから。」

「へ？」

「良いタイミングで届いたよ、コレ。」

「え……」
「ジャージ」
「？」

箱から出てきたのは俺には明らかに大きいサイズのジャージだった。シンプルな黒の上下で胸にはスポーツメーカーのロゴがプリントされている課長に似合いそうなデザインだった。

「堤さん今日お泊まり？」

「ああ、明日は休みだし帰るのも面倒だしな。」

「じゃあ後でゲームしよ！堤さんが一緒に買ったゲーム僕もやりたかったやつなの！」

「あれは俺のじゃなくて優に買ったんだよ。前に欲しいって言うてたろ？」

「覚えててくれたの？ありがとう！じゃあ早く片付けしてやるからね」

優はピョンピョンと嬉しそうに跳ねながら玄関へ行き片付けを再開する。

「課長。」

「何？」

「優にあんまり餌付けしないで頂けますか？」

「光が俺のモンになったら考えてやってもいいけど？」

ギョッ

電車の中と同じ様に俺の左手を課長が握り、自分の顔を近づけてくる。

「か、からかわないで下さい！」

課長の手を離し、俺は着替える為に2階の自室に入り扉を閉める。そしてその場にしゃがみ込んだ。

自分の左手を見る。今日何度も握られた俺の手。

課長の手は俺の手より一回り大きくて、ゴツゴツしてて・・・

暖かった。

『上出来！』

自分の頭を撫でる。・・・あの手で撫でてもらったんだ・・・。

俺、電車で助けてもらってからずっと課長の事はつか考えてる。

なんでたろ？

もう一度、左手を見る。

課長は今まで恋人にどんな風に触れてきたんだろ？

あの手で。

・・・。

何か、面白くない。自分以外があの手に触れるのが気に入らない。モヤモヤと心の中に黒い影ができる。

「・・・やめよ。」

スーツを脱ぎ、ジーンズとTシャツに着替える。深く考えてちゃいけない気がする。スーツをクローゼットにしまい扉を閉めた。

一緒に自分の心も閉める様に。

俺は、課長が泊まる事を許したわけじゃありません。

絶対に？

・・・でも、目の前に映るこの光景は何でしょうか？

食べかけの宅配ピザとスナック菓子が机の上に散乱し、フローリングの床には机に乗りきらなかったグラスとビールの空き缶、それにワインと日本酒。

「また点入れられた？堤さん手加減してよー！」

「ダメー。俺勝負事には一切手を抜かない主義なの。」

「ケチー！大人げないよっ！」

「優、勝負の世界は厳しいんだ、うん。」

テレビ画面に向かい課長と優がサッカーゲームに熱くなる。2人は夢中になり俺の事なんて眼中ない。課長もジャージとTシャツを着て胡座をかき、すっかりリラックスしている。

「課長ー、そろそろ終電のお時間ですが・・・。」

「へー、そう・・・あっ！優！そこからスライディングしてくんなっ！」

「僕勝つ為には手段は選ばないよっ！」

「言っねえー。」

無視かよっ！

今度は優の肩をポンと叩きながら言ってみる。

「優ー、そろそろ眠くなつてこない？」

「んー、へーきだよー？」

「あの、課長ー？・・・」

「後で構ってやるから静かにしてー。」

こいつら・・・。

「あーそうですかっ！じゃあ俺はもう勝手にしますからねっ！」

その場に立ち上がり2人に向かって叫ぶ。が、俺の声は届かない。

「堤課長これ頂きます！」

課長がゲームに夢中になっているのをいい事に俺は近くにあったワインをグラスに注ぐ。

あつたまきた！この高そうな酒全部俺が飲み干してやる！

課長がネットで買ったワインを味わう事もせずひたすら体に流し込む。つまみが欲しくなり、酒が入っているダンボールを開けると高級そうな包装がされたチーズとクラッカーを発見した。

ラッキーー　ワイン飲むにはピッタリじゃん。

ビリビリと包装を破り一口サイズのチーズをクラッカーにのせ、ワインと合わせながら飲む。

なんか、楽しい〜

いつの間にかワインがなくなり、また新しいワインをダンボールから見つけ飲み始める。そして2人掛けのソファアを占領して足を伸ばしてみる。

行儀悪いけど今日はもいいや、こっちの方が楽だし

「ん〜、上手い！」

酒が入って気持ちよくなり、思わずそんな事を口にする。

フワフワ

フワフワ

フワフワ

俺は目を閉じた。

そこからどうなったか・・・覚えていない。

「・・・かる、光・・・。」

俺を呼ぶ声がする。低くて、耳に心地よい優しい声。

「大丈夫か？光？」

ソファーに横になり、丸く眠っていた体を軽く揺さぶられた。目を開けると課長が仕方ないなあと笑いながら俺を見つめていた。

「か、ちょー？」

「ワイン2本空けるなんて飲み過ぎだ。具合悪くないか？」

「ぐあいはあ・・・いいれすっ」

元気良く手を上げて返事をする。課長はプツツと笑い、俺の髪を撫でる。

「優はもうとつくに風呂入って寝たぞ。光はどうする？」

「んん〜・・・」

「光？」

「抱っこ？」

俺は両手を広げて課長を見つめた。髪を撫でていた課長の手が一瞬固まり、また撫でてくれる。

「何？酔つと甘えたなの？」

「早く抱っこー。」

「しかも我儘だ。」

課長はソファーに座り、膝の上に俺を対面をする形でまたがらせた。

「はい、おいで。」

課長の合図で俺は胸の中に飛び込む。首筋に顔を埋めてゴロゴロとじゃれる。まるで猫にでもなつたみたいだ。

「見ちゃいけないものを見てしまった気分だ……。」

「なんかー、フワフワしてきもちいいよ?」

「……。」

「なあに?」

「ヤバイだろ、コレ。」

課長の呻く声が聞こえた気がしたけどそんなの関係ない。ギョッと抱きつくと課長の体の温もりと体臭を感じて胸がキュンと高鳴る。課長の手が愛おしい様に俺の髪や顔、首筋を撫でてくれる。

「かちよーの手、好き?」

「手だけ?」

「?」

俺は首筋を撫でる課長の左手を両手で掴み自分の顔の前にもってくる。

電車の中で俺はこの手に助けられたんだ……。

ペロッ

課長の手が愛おしく思えて思わず人差し指を舐める。そして今度は中指を舐めてみる。全然嫌じゃない、むしろ楽しい。

パクッ

課長の左手の人差し指をくわえてみる。

指、あったかい……。俺の口の中に……。課長の指が……。

「かひよ・・・うんアっ・・・ふっ、んんっ・・・。」

口の中から指が抜かれたと思ったら、直ぐに課長の舌が俺の口の中に入ってきてきて口腔を弄る。

「ふあっ、ん・・・あ・・・っんん・・・かちよ、気持ち・・・いい・・・よあっ。」

「もっと?」

「もっと、して・・・んあっ!」

もう何がなんだか分からない。頭がボーっとして、でも課長のくれるキスが気持ち良くて・・・今はこの快感に溺れてみたいと思っただ。

「かちよ、体・・・あっつい・・・よあ。」

「ん?あれだけ飲んだから体も火照るって。」

「ポカポカ、すりゅ・・・。」

課長の手を取り服の上から自分の胸に触れさせる。課長は少し呆れて、俺を宥める様に言った。

「・・・お前な、俺も男だからあんま煽るな・・・我慢出来なくなるだろ?」

「が、まん?」

「そ、光と気持ちいい事したくなんだよ。」

チュッと俺の耳朶に課長はキスをする。その音はまるで魔法にかかると感じるくらいに俺の体をもっと熱くさせた。

「・・・して?」

「え？」

「我慢・・・しちゃ、ヤダ。・・・一緒に・・・気持ちよくなる？」

チュツと今度は自分から課長の肩に腕を回し、キスをした。課長は目を丸くさせ、次に噛み付く様な口づけをしてきた。

「ふぁっん・・・んふっ、んんあ・・・っん・・・あ。」

「もう知らねーよ?・・・光。」

「か・・・ちよ・・・っ、ひゃっ!」

ソファーに組み敷かれる形に押し倒された。まだ頭はクラクラするし、思考がはつきりしない。スツと課長の手が俺のTシャツの下に進入してきた。その手はなぞるようにゆっくり、優しく背中から脇、胸へと上がっていく。

「これ、どう?」

「あ!・・・やぁっ!・・・んっ」

不意に胸の突起をコリツと引つかかれる。まさかそんな所を触られるとは思ってなくて俺はビクツと仰け反りかえる。

「なっ・・・そんなっ・・・とこ触んないっ、でえ!」

「気持ちいいんだろ?無理しないで声出せよ・・・。」

「あぁっ!・・・やぁ・・・っん」

課長は両手で俺の2つの突起をこねくり回す。強弱をつけていじられると痛いような、こそばゆいような・・・とにかく焦れたい。

「もっと・・・ちゃん、と・・・やっ・・・てえっ!」

「もっといじって欲しいの?」

コクコクと必死に頷く。課長は獣の様な目で俺を見つめ、舌なめずりをした。顔を俺の胸の中心に近づけ、舌先で突起を軽く突く。

「あつ・・・ん！」

「・・・可愛い。」

次に舌全部を使って突起を舐められ、クチュっと卑猥な音が漏れる。左胸を舌で舐められ、右胸はさつきと同様課長の手によっていじられる。左右どちらも違う様に感じて、もう気が遠くなりそうだ。

「光のココ、すっげえ尖ってる・・・美味そう。」

「やあ・・・っ・んっあ！」

「反対もやってやるから・・・もつと乱れちまえよ。」

「ひゃっ!・・・かちよっ・あんっ!」

今度は右の突起を舌で攻められる。俺は課長がくれる快樂にただ従うしかなく、行き場のない手でソファーカーバーを力なく掴むしかなかった。

課長は突起を舐めながらカチャカチャと俺のベルトを外し、ジーンズのファスナーを下ろし始めた。

「あつ、や・・・だっ・・・なに？」

「光のココ、可愛い・・・キスと乳首舐められて興奮した？」

ジーンズの中に課長の手が潜り込み、下着の上から俺のモノをギョツと握りこまれる。

「ふあっ?・・・あんっ!」

その手は俺のモノをゆつくりと上下に扱きあげ、最後には下着の上からでもはつきりと分かるほどそれは屹立してしまった。

「光見て、凄い立ってる……。」

「……やつ、だあ！……見ない……でっ！」

「ほら、腰あげて……光の大事な所、生で見せて。」

「っあん！」

カリッと課長に胸の突起を強く噛まれ、思わず腰が浮いてしまった。その一瞬の間を見逃さず、一気にズボンと下着を脱がされる。上のTシャツは胸までめくれ上がり、光はほぼ全裸の状態になってしまった。

「思った通り、光のキレイな色してんな？自分であんまりやらない？」

「……そんなん……こと！……言え、なっ……ひゃあっ！」

俺のモノを課長は口に一気に飲み込み、奥まで含むと舌で裏筋を舐め回す。

「ああっ！……だっ……め！んんっ……声っ、我慢……出来っ……なっ……あっ！」

俺は少しでも声を押さえたくて自分の口を両手で塞いだ。しかし、課長のくれる快感が強烈過ぎて中々押さえる事が出来ない。課長は口の中から俺のモノを抜くと、いやらしい笑みを浮かべ口を拭った。

「我慢すんなって。優は今頃ぐっすり眠って起きてこないから。」

「だっ……てえっ！」

「いいから……こっちに集中しろよ。」

「ひゃあ！・・・あア・・・っん！」

課長は再度俺を口に含むと今度は激しく出し入れを開始した。先端から一気に奥深くまで飲み込む。その繰り返しで俺はもうイクことしか考えられなくなる。

「かちよ！・・・離し・・・て！・・・も、俺・・・あっ！」

「出そうか？」

「イっちゃ・・・う・・・からっ！・・・あんっ！・・・出っ・・・ちゃ・・・うっ・・・んっ！」

「イケよ。」

「・・・んあっ、ああっんっ！」

ドクドクツと俺の白濁が勢い良く課長の口の中で弾けた。出したばかりでまだ放心状態の俺を課長は満足そうに眺めている。次に俺の白濁を口から出すと、それを自分の手のひらにのせた。

「ご馳走さま、次は俺の番な。」

そう言つと俺の両足を高く持ち上げ、太ももの内側に先程の白い白濁を塗り付けた。そして自分のズボンから大きく上に向いている怒張を取り出す。

「な・・・に？」

「大丈夫、俺酔ってる相手を抱くほど非道じゃないから・・・さっ！」

「ひゃあっ！」

白濁を塗り込められた両太ももをしっかりと閉じる様に押さえられ、その間に課長の熱い怒張が入ってくる。俗にいう素股だ。

「光、足に力入れる・・・じゃないといつまで経っても終わらないぞ。」

「やあ・・・っ!だっ・・・て!」

「ったく、しゃーねえな。」

「ふあっ!・・・っ・・・あんっ!」

課長は俺のモノを再度扱き始め、自分の腰の動きも早める。俺はまた快感の波にさらわれ、大きく喘ぎながら2回目の絶頂へと向かう。

「そう、その調子で力入れる。いいな?」

「ああっ!・・・っはあ!・・・ま、た・・・イツ・・・ちやうっ!」

「それとな、俺の前でそんな無防備な顔してみる。次は・・・」

「っ!・・・やあっ・・・あん!ダ、メ・・・んああっ!」

「マジで抱くからな。」

「あああっっん!!!」

最後に荒々しく口づけをされながら今度は2人同時に果てた。ビュツと2人分の白い白濁が俺の胸に飛び散る。ゼイゼイと息が上がりに、頭が真っ白になる。

か、ちょ・・・う・・・

気が遠くなる。視界が次第にぼやけて、真っ暗になった。

「光・・・好きだ・・・」

近くで聞き覚えのある低いバリトン声が・・・そう言ったような・・・気がした。

8 ワインでフワフワ（後書き）

お待たせしましたー！
エロ炸裂です（笑）

この数日このエロの所どうしよう？とエロしか考えてなかったです！
で、結果・・・

本番は持ち越しする事になりました。

その代わり私の思いつくギリギリのエロを考え・・・

素股になりました（笑）

まだまだ話は続きます。エロも続きます（照）

次回をお楽しみに！

9 二日酔いの朝

朝の光がカーテンの隙間を通って俺の顔にかかる。

「ん・・・眩し・・・」

まだ眠っていたくて反対側へ寝返りを打ち、肩まで掛かっていた布団を頭までかぶり直し再度深い眠りに入ろうとした。
その時

「光兄ちゃん！！！！朝！！！！」

パンツと勢いよく部屋のドアが開き眉間に皺を寄せた優が入ってくる。俺の寝ているベッドに近づくと、布団を掴み引き剥がし始める。

「ゆ・・・兄ちゃん疲れてんの、もうちょっと・・・寝かせて・・・」

「だめー！！朝ご飯冷めちゃう！寝るなら食べてからにしてー！」

「・・・ゆ・・・」

「ほら、早く起きて！僕急いでるんだからっ！」

問答無用とばかりに俺から布団を奪いそれを床に放り投げた。・・・
我が弟ながら容赦なしだ。優に無理やり起こされ俺は仕方なく重い体を引きずりながら一階のリビングへと向かった。

何か、頭痛いし怠いし・・・気持ち悪い。

「はい、どござ。」

「・・・」

椅子に座ると優が朝食のプレートを支し出す。真っ白なプレート

てそれから・・・。

あれ？ん？それから・・・？？

「堤さんご飯ここ置いとくね。じゃ、僕出かけるから。」

「ゆ、優！どこ行くの!？」

「ドッジボールの練習で学校行くの。あ、お弁当持っていくから夕方まで帰らないから。」

「夕方!？」

「うん。堤さんご飯食べてゆっくりして行ってね！また遊ぼうね！」

「ああ、いつでもいいぞ」

「兄ちゃんは今一日安静にする事!!一日酔い治んないよ!!」

優は机にあった弁当箱をリュックにしまつと帽子をかぶり家から飛び出して行った。

・・・そして家には俺と課長の2人きり。

「お、美味そう。」

課長は椅子に座ると優が用意してくれた朝食を食べ始める。俺も再度課長の向かいに座り直し飲みかけの野菜ジュースに手をつけた。

「か、課長・・・」

「ん？」

「昨日・・・泊まってたんです、ね。」

「はあ？お前覚えてないの!？」

「え？」

「うわ、最悪。」

「お、覚えてますよ!!!・・・痛!」

俺は課長に言い方にムカついて思わず立ち上がると、一日酔いの

頭痛が襲ってきた。

「へー、何を覚えてんの？」

「え……だから、その……」

課長がニヤニヤしながら俺に問いかける。思い出せない俺はつい目が泳いでしまう。

「ヒント。光、後ろ向いてみな？」

「後ろ？」

課長は俺の後ろのキッチンを指差す。俺も振り返りキッチンを見渡すと、何やら見覚えのある空のワイン2本が流し台にあった。

「!？」

「思い出した？」

あれ!?!いや、ちよつと待て。全然整理出来ない。優と課長がゲムして……全然課長帰んなくて……ワイン飲ん……だんだよな?頭痛いし。

それから……? ??? ? ? ?

「課長、俺何かご迷惑をおかけ……しました……か？」

「いんや、迷惑どころか可愛かった。」

「可愛い!？」

「お前酔うといつもあんなだっけ？」

「あんなってどんな!？」

「……。」

課長は朝食を食べ終わり、テーブルの隅にあった灰皿を寄せタバ

「こに火をつける。
そして短い間。

「何も・・・してないですよね？」

「酔っ払った光が抱っこしろって甘えてきた。」

「な！？嘘言わないで下さいっ！」

「一緒に気持ち良くなるうって誘ってきた。」

「恥ずかしいのか怒っているのか、湯気が出るみたいに体中がどんどん熱くなる。俺がそんな事言うはずが無い！でも記憶がなくて・・・正直焦る。いつもなら俺をからかう様に話すはずなのに、課長の少し怒って淡々と話をする様子を見るとまさかという気持ちにもなってくる。」

「嘘だ！！！」

「お前何も覚えてないくせに何でそんなに嘘だって言い切れんの？」

「!?!？」

「俺の前で記憶飛ばす程酔っ払ったお前が悪い。」

「それは?.....」

俺は次の言葉が見つからなくて立ち尽くす。

「.....風呂入ってきます。」

少し頭を冷やしたくて俺はその場を後にして風呂場へと向かった。まずい.....本当に覚えてない。俺本当にあんな事言ったのか!?

『一緒に気持ちよくなるう』

.....。

何てこと言ってるんだ俺！？いや、まだそうと決まった訳じゃ……。

風呂場で熱いシャワーを浴びながらどうにかして思い出そうとするもやっぱり思い出せない。ふと、目の前の鏡で自分の姿を見てみる。さっきまで話してた課長の裸の上半身を思い出す。自分の体とは大違いだ。広い背中と肩幅、筋肉質な腕、そして厚い胸板……

ん！？……胸板！？

「な、何……これ！？」

鏡に映る自分の胸板を見ると多数の鬱血があった。良く見ると胸以外にも腹や脇腹、そして太股の内側にも小さな鬱血の花びらが散らばるように無数についていた。

「え……これって……」

……キスマーク？

「か、課長　　ッ！！」

俺はタオルを腰に巻きつけただけの格好で課長の元へと走る。

「光？もう上がったの？」

「こ、ココココ……コレっ！！」

「おお、綺麗に付いてんなあ。」

「かちよ……が付けたん、ですか？」

「お前自分で吸えんの？ここ。」

「ひゃっ……！！」

課長は俺の胸の突起近くのキスマークを面白そうに触る。いきなりの不意打ちにビックリして思わず変な声が出てしまった。

「あ！足の！！・・・太股にも！！あつて！！それもっ！！・・・痛っ！」

二日酔いのクセに大声を出し過ぎて頭に強烈な痛みが走る。思わずその場に座り込むと課長は仕方なさそうに俺の腕を掴んでソファに座らせた。

「とりあえず髪乾かせ。風邪引くぞ。」

「だつて！！・・・」

「風邪引いて仕事に穴空けんのか？」

「・・・。。。」

「ちよつと待つてる。」

課長はタバコを吸ったままりビングから出て行くと、すぐにドライヤーを持って現れた。

「大人しくしてろよ。」

「自分で・・・」

「い・から。」

ソファに座った俺の後ろに課長が立ち、ドライヤーの暖かい風で俺の髪をどんどん乾かしていく。課長の大きい手が少し乱暴にゴシゴシと髪の間をすり抜ける。

「課長・・・髪乾かす時位タバコ吸わないで下さい。・・・煙たいです。」

「はいはい。」

せめてもの仕返しに言ってみるも課長は何食わぬ顔でタバコを吸い続ける。

この人、やっぱり性格悪い……。

人に髪を乾かしてもらったのって初めてだ。何か……悪くないかも。でも緊張してるせいか凄くドキドキして、呼吸が上手く出来ない。早く終わって欲しいような……もう少しこのままでいいよ
うな……。

髪を乾かし終わると課長は甲斐甲斐しく水の入ったコップと薬を俺に渡してくれる。

「これ飲んで。優が二日酔いの薬用意してた。」

「あ、すみません。」

そして薬を飲み終わるのを見届けるといきなり俺を担ぎ上げた。

「うわっ！ちよつと課長！下ろして下さいっ？っ痛！」

「まだ頭痛いだよ。運んでやるから大人しくしてろ。」

「……。」

軽々と俺を肩に持ち上げるとリビングの扉を開け、階段を上る。

自分の部屋に到着すると課長はベッドに俺を下ろし床にあった布団を掛けてくれた。

「もう寝ろ。」

「課長、俺まだ聞きたい事が？」

そう、俺に付いてるキスマーク。一体昨夜何があったのか……

その、一線を越えてしまったのが気になって仕方ない。

「……最後までやってねえよ。」

吐き捨てる様に課長は言った。

「え?」

「もういいだろ。ほら早く寝ろ!」

「ちよつと課長?」

課長は何とかして聞き出そうとする俺の額に自分の額をくっつける。

「……これ以上聞いたら昨日の続きすんぞ?」

「う……。」

「おやすみ、光。」

優しく頬を撫でる課長の事が憎らしくて、布団を頭までかぶる。

布団の外ではククツと課長の意地悪い笑い声が聞こえた。子供をあやす様にポンポンと布団の上から俺を叩く音を聞いているうちに次第に睡魔が襲って来る。

「俺、課長の事……許した訳じゃ……ない、ですからね。でも……色々、めいわ……く……かけ、て……ゴメン……な……さ、い……」

……ヤバい。もう……限界。

パタツと全身の力が抜けた様に俺は眠りについた。

ベッドに腰掛けその様子を見ていた堤は深い溜息をつく。

「・・・何だよこの生殺し状態。すっかりハマってんな、俺。」

堤は新しいタバコを取り出し、暇を持って余すかの様にそれに火をつけた。

9 二日酔いの朝（後書き）

大変お待たせ致しました！素股後のお話です（笑）本当はこの話のタイトル「素股をした朝」にしようと思っただけですが余りにも下品極まりないので思い留まりました！今度素股の話を書いた時にでも検討します、はい。

次回は少し会社らしい話を書いていく予定です。まだまだ続きますのでどうぞお付き合い下さいませ

どうでもいいけど後書きで何回素股って言ってんだ私・・・（照）

10 突然の・・・

俺、最近ヘンかも・・・

朝の朝礼が終わりグループ内のミーティングも終わった午前十時。自席に頬杖をつきながら光はハアツとため息が漏らした。

いや、体調が悪いとかじゃなくて、気分がモヤモヤするっていうか・・・集中出来ない。あの日以降あの人のことを妙に意識するようになってしまったからだ。

誰を意識してるのかって？それは・・・

「課長、今お時間よろしいでしょうか？」

俺の斜め向かいの課長席に一人の女性社員がファイルを持って声をかけてきた。

「ん？今野ちゃんどうした？」

「先日申請頂いた稟議書と一緒に添付している見積書の件ですが・・・」

課長が「今野ちゃん」と呼んだその女性は、資料を課長の目の前へ差し出し話を始めた。俺はその様子をデスクトップのモニターの間隙からこっそりと盗み見る。途切れ途切れでしか聞こえないけれど課長が話すと今野さんも笑いかけ、課長も笑っている。今野さんは手にしていたファイルで口を押さえ必死に笑いをこらえて実に楽しそうな光景だった。

・・・面白くない。課長も課長だ！珍しく席に着いてると思ったら

他部署の子とイチャついて！仕事しろっつーの！

イライラして思わずキーボードを打つ手が強くなる。しばらくして今野さんが席から離れていき、彼女が置いていった資料に課長は目を通す。ふと、視線に気づき課長は俺の方を見た。

「光？どした？」

「えっ！？べ、別に！何でもありません！！」

「そっか？」

俺はすぐに課長から目を逸らし視線を目の前のパソコンのモニタに移動する。心臓がバクバク音を立てているのが分かる。何やってんだよ俺！何で課長の事目で追ってたんだ！

そう、意識しているのは課長。声が聞こえると身体がビクンと反応してしまい、姿を見るといつの間にか目で追っている自分がある。まさかとは思うけど・・・この甘酸っぱい、胸が苦しい感覚には覚えがある・・・でもさ・・・

あの課長だぞ！？それに俺ノンケ！！・・・だったはず。

それにあの人仕事しないし女つたらしで口悪いし強引でそれから
e t c …

だめだ、考えたらきりが無い。とにかく俺はまだ、認めたくなかった。この気持ちをもう少し、時間をかけてじっくり整理したかった。

その時の俺は、これから課長と過ごす時間が皆無になるなんて思ってもみなかった。

それは一本の電話から始まった。時刻は朝八時半、社員が次々と出社し今日のスケジュールやパソコンのメールのチェックをしていた時だった。

「骨折ですか!？」

課長の声が部内全体に広がった。回りにいた社員の視線は一斉に課長に集まり、事の次第を見守っている。

「・・・はい、それで容態は・・・はい、そうですね。大丈夫ですか?・・・ええ。分かりました、少々お待ち下さい。・・・部長、堤です。平野代理からの電話繋ぎます、はい。」

課長は内線で平野代理からの電話を部長へ繋げると、腕を組み大きくため息を吐いた。眉間に皺を寄せ、今までに見たことのない難しい顔をしていた。

「課長、何かあったんですか？」

俺が恐る恐る尋ねると課長は「んん・・・」と歯切れの悪い返事を返す。

「・・・平野代理が交通事故にあった。」

「ええっ!？」

「・・・昨日の夜に歩いて近くのコンビニにまで行く途中、信号無視したバイクと衝突したらしい。」

「そ、それで!平野代理は!？」

事故の様子を想像して顔から血の気が引いていくのを感じる。

「右足骨折で全治二ヶ月の入院。」

「二ヶ月!？」

「幸い昨日の検査結果では足以外の異常は見られなかったらしい。」

「そうですか……。」

骨折はしたものの平野代理の命に別状なくて良かったと胸を撫で下ろした。……ん!? 課長今全治二ヶ月って言ったよね!?

「課長!？」

俺は剣幕した顔で課長を見上げると、何が言いたいか察しがついたみたいに課長は頷く。

「俺らのプロジェクトのシステム入れ替え一カ月後なんだよ……。」
「はい……。」

システム入れ替えとはその名の通り今現在クライアント側で稼働しているシステムプログラムと、俺達のプロジェクトが作成したシステムプログラムを入れ替えること。今回は銀行で使用されているシステムプログラムの入れ替えだから客が銀行を利用していない深夜に実行される予定だ。入れ替えの作業自体は手順さえミスしなければ難しい事はないのだが、その後正常にシステムが稼働しているかを確認しなければならぬ。たとえば銀行に設置されてあるATMのモニターの表示が新しい画面に切り替わっているか、ATMを利用した客に出す明細書の印字内容が新しい法律に沿った内容になっているかなど、今回は特に確認項目が多い。しかもその確認作業は平野代理を中心に進行していたのだった。

「課長……まずい、ですよね？」

「ああ……。」

「……。」

「……。」

お互い自然と口数が少なくなる。それもそのはずだ、ここで中心メンバーの一人である平野代理が抜けてしまうと、取引先であるクライアントの銀行に状況説明と今後のスケジュール調整、そして今回のプロジェクトに関わっている全ての協力会社に組織内容の変更を連絡しなければならぬからだ。課長は今回のこのプロジェクトメンバーの選抜に当たり真っ先に自分の右腕として指名したのは平野代理だった。一見温厚そうに見えるが仕事に一切の妥協がない。そして何よりSEとしての経験が長く、知識が豊富だから課長も安心してプロジェクトの責任者が出来ていたはずだ。その平野代理が入院だなんて……

「堤！」

部長が平野代理との話が終わったのか課長を呼んでいた。部長の周りには話を聞きつけた次長や他の上層部が集まっていた。

「……光、社外から平野代理宛にかかってきた電話は全部折り返しにする。俺が掛け直す。それからまだ入院の件は言うな、下手な混乱を招く。」

「……分かりました。」

課長はそう言い残すと席を立ち、上層部の集まる方向へ向かって行った。俺は何も出来る事がなくて、不安を抱えたまま課長の帰りを待った。

10 突然の・・・（後書き）

お久しぶりです！そして今回更新早いです ひゃっほい！！！！・・・
・というのもここから次の話が長くなりそうだったので一度ここで
区切りました（笑）そしてまさかの平野代理が骨折！！・・・残念で
す、はい。

次回は新キャラ登場です お楽しみに！> <！

11 胸の痛み

俺は課長に言われた通り平野代理宛の電話対応の傍ら、自分なりに今後のスケジュールの見直しや平野代理が担当していた主要取引先についてまとめていた。けれどもそんなの気休めでしかなくて、内心はせっかくここまでやってきたプロジェクトがどうなってしまっうのか気になって仕方なかった。課長に無理やり事務局メンバーに指名されたものの、正直この会社に入社して初めて重要プロジェクトの一員になって今までにない位のやりがいを感じていたのに・・・何としても成功させたい、諦めたくない気持ちで俺は課長の帰りを今か今かと待ち続けた。

堤課長は部長達上層部と一緒に別室に移動し、昼休みが終わる一時になってようやく戻って来た。髪を軽くかき上げながら俺の斜め向かいの席へと歩く課長の顔はやはり朝と変わらぬ眉間に皺を寄せた難しい顔をしていた。

「課長！どうでしたか!？」

「光、丁度いい所にいたな。ちょっとこっち来い。」

少しだけネクタイを緩めながら左手で「おいで」と俺を呼んだ。なんたる・・・きつとプロジェクト関連の事だと思っけど・・・やっぱりまずい事になっているんだろうか？席を立ち恐る恐る課長の隣へ向かうと急にポンポンと両肩を叩かれた。

「課長？」

「・・・簡潔に言う。平野代理がプロジェクトリーダーから外れる事になった。」

「!？」

「で、代理がいたりリーダーのポストに新しい人員を入れる事になった。」

突然の事に俺は目を丸くして課長を見つめた。残り一ヶ月しかないこのプロジェクトにいきなり人員変更だなんて……。俺はゴクリと息を飲み課長に問いかけた。

「その、新しい人ってもう決まったんですか？」

「……決まった。」

「そう、ですか。代理が抜けたのはかなり痛いですけど……新しい人が早く決まって良かったです。」

「まあ、そうだな。でも……。」

課長は何故か言葉を濁したまま黙ってしまった。確かに平野代理の存在は凄く大きいけど、このまま誰も人員が補充されないよりはマシだろう。それとも何か他に問題でもあるのだろうか？光はそんな課長の姿を見つめ首を傾げた。

「堤課長！来てやったわよ！！！」

バシツと背後から課長の背中を叩く音がした。少し前のめりになってバランスを崩した課長の陰から一人の女性社員が仁王立ちをして俺達を見ていた。綺麗な黒髪のアートロングに真っ直ぐに揃えられた前髪はまるで日本人形そのものだった。大きな瞳と切れ長の眉、そして俺と同じ170センチ位の身長のパンツスーツスタイル姿はモデル並みの美人だと伺える。

「百合……相変わらずそのガサツな性格は直ってないな。」

「うっさいわね！せっかく人がピンチヒッターで入ってやったのにその態度は何！？」

「あー、はいはい。それは感謝してるよ。」

「あんた本当に感謝してんの？」

「・・・してるよ。お前あんまりしつこいとますます嫁の貰い手なくなるぞ。」

「そつちこそいい加減身を固めたら？あ、周りは玉の輿目当ての女しかないんだっけ？」

目の前で繰り広げられるやり取りに俺は驚きを隠せなかった。まるで蛇とマンゲースみたいに見えない火花を散らしている。課長の周囲の女性は基本良く見られようと上目遣いや可愛い仕草、ボディタッチなんかで気を引こうとする人が殆どなのにこの女性はそんな素振りが全くない。いや、むしろお互い威嚇しあっているようにも見えた。

「課長・・・その方は？」

「ああ、今日からうちのプロジェクトリーダーになった三課の久川ヒサカ百合フユリだ。」

俺達の在籍しているシステム部は全部で五つの課に分かれていて、各取引業者の依頼にあわせてシステムプログラムを作成し提供している。課長と俺は第一課に所属しているが他の課の人達とは全く接点がない。依頼されている会社も業種も内容も違うので会社で顔を合わせる事があっても挨拶を交わす位の疎遠な関係だった。しかし今回はその三課からわざわざ人員を引き抜いてくるなんて随分強攻策に出たもんだ。俺は驚きを隠せずにいた。

「彼が例の事務局君？隣の課だから今まであんまり面識なかったわよね？久川です、よろしくね。」

久川さんは名前の百合の如く真っ直ぐ凛とした姿勢で俺に握手を

求めてきた。

「いえ、こちらこそ。今回初めて事務局を担当している吉田光です。よろしく願います。」

慌てて俺も久川さんの手を握り握手に答える。それにしても凄い美人だ。出来るキャリアウーマンって感じで、多分年齢も課長と同じ・・・位かな？

「吉田君、顔に書いてあるから答えるけど年齢は32歳で堤課長と同期よ?」

久川さんは悪戯にウィンクをし。ペロツと俺に舌を出した。

「え!?!いえ、俺そんなつもりじゃ!」

「光、気にすんな。百合は初対面の人間にそうやって自分の歳言っ
て反応を楽しんでるだけだから。」

「あら、失礼ね。周りの男共がいつも聞きたそうにしてるから教えてやってるだけよ。これは親切で言ってるのよ。」
「良く言うよ。」

課長と久川さんは言葉は悪いけれどもそれがじゃれ合いの様にお互い言葉を交わす。そういえば課長取り巻きの女の子達でも絶対に名前では呼ばないのに久川さんだけは下の名前の「百合」って呼んでる・・・。俺はそんな二人のやり取りを見て少しだけ胸が苦しくなった。

「とりあえず今から俺と百合で取引先回って事情説明してくるから。で、明日の朝一にプロジェクトメンバー全員集めて改めてこいつの紹介するつもりだから。」

「分かりました。それでは関係者には連絡しておきます。」

「あと・・・今まで光一人で運営してた事務局、協力会社から一人入れる事になったから。」

「え！？・・・そう・・・ですか。」

「・・・悪いな。」

「ほら！堤課長行くわよ！あたし挨拶回り今日で終わらせたいんだから！」

「ああ・・・じゃあ後の事よろしくな。」

課長はいつもの様に俺の髪をクシヤツと軽く撫で、久川さんと部屋から出て行った。

『事務局、協力会社から一人入れる事になったから』

・・・俺だけじゃ力不足だって言いたいのかよ。思わずギリツと奥歯を噛みその場に立ち尽くす。

悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい

確かに事務局なんて大役初めてで色々迷惑かけてたかもしれない。でもいきなりこれは酷過ぎる。課長は俺の働きに不満があったんだろうか？自分で指名したくせにやつぱり俺だけじゃ荷が重かったって・・・そう判断たんだろうか？悪いほうにばかり考えは膨らんでしまう。

・・・課長が俺を指名したくせに。

席に戻りパソコンの画面を睨みながら仕事に戻る。そう、仕事は待つてはくれない。もし、本当に課長が俺の事を力不足だと思っていていたらそれは仕方ないことだ。これから挽回するしか・・・認めてもらうしかない。俺は情けなくて、悔しくてやりきれない感情を必死に押し込め目の前にある仕事を無我夢中で消化していった。今日は課長に頭を撫でられても、全然嬉しくなかった。

翌日一番大きな会議室を使ってプロジェクトメンバーによる定例会議と新プロジェクトリーダーになった久川さんの挨拶が行われた。百人は集約出来る会議室の座席はどこも満席で突然の人員交代で俺達社内のメンバーや、協力会社のメンバーも不安な色を隠せずに行った。しかし久川さんはそれをものともしない挨拶をして周囲を驚かせた。

「改めまして、今日からこのプロジェクトのリーダーを任せられました久川百合です。私は前任の平野代理の様な仲良しこよしの仕事をやる気は更々ありません。突然のメンバー交代で驚かれています方が多々いらっしやるようですが、こんなアクシデント私達システム屋にとっては日常茶飯事。事務局だってこれ位の事見越してスケジュールを管理している・・・そうよね、事務局？」

会議室の一番壇上に一人立ち、マイクを使って話していた久川さんが急に俺の方を見て問いかける。

「は、はい。仰る通りです。」

俺は反射的にそう答えてしまった・・・。久川さんはその返事を聞くと俺に向かって「よくできました」とニッコリ微笑み再度マイクを強く握り直し話を続けた。

「現状人員は不足しているかもしれませんがスケジュール的には何ら問題ありません。よって私はここにいるメンバー全員の仕事に対するモチベーションの維持・・・いえ、それ以上を望みます。その為に私も努力は惜しみません、何かあったらすぐに報告してください。このプロジェクト、絶対に成功させます。以上です。」

久川さんはそう言うと軽く礼をし、最後に目の前にいるメンバー全員を瞬きもせず眺めた後課長の隣の席へと戻った。そして久川さんの挨拶後のいつもの定例会議は明らかにメンバー全員の目や顔つきがいつもと違っていた。その白熱した討論、質疑を実施させたのは紛れもなく久川さんの言葉の威力だった。俺はまた自分の事が情けなく思ってしまった。自分はここまでメンバーのモチベーションを上げる事は出来ただろうか？団結させる事が出来ただろうか？俺は胸の痛みを抱えながら会議の進行を進めた。

11 胸の痛み（後書き）

新キャラ久川姉さんの登場です！実は女性キャラを登場させたかったので嬉しいです！光君には辛い事だらけの話でしたが今後どうなるのか！？

……作者にも分かりません（笑）

次回は一週間以内には更新出来るはずなのでお待ち下さいませ。
（いつも遅くてすみません）

12 嫉妬

久川さん・・・本当に凄い人だ・・・。

定例会議も無事に終了し時刻は十二時。俺は次々と会議室から出て行くメンバーを見送りながら今日何度目かになるため息をついた。彼女は人の動かし方を良く知っている。会議を見て思ったけど、メンバーの一人一人に合わせて褒めて持ち上げたり、時には挑発してやる気にさせたりと自分が切っ掛けとなり全員のモチベーションを上げていた。平野代理が「皆と一緒に頑張る」タイプであれば久川さんは「背中を押すから自分でやれ」というタイプだ。とにかく俺はそんな彼女と自分の力の差を目の当たりにして落ち込んだ。

「お疲れ様です、吉田さん。」

「風間さん・・・。」

頬杖を付いて盛大にため息をついていた俺の隣で、風間さんがニコニコと楽しそうに見つめていた。耳に掛かるほどの艶のあるブラウン色の髪、モデルと間違っ程の180を超える身長とスレンダーな体格。加えて女性が好みそうな甘いマスク。さっきの会議でも一人で女性の視線を独占していた彼は、課長が言っていた新しく協力会社から事務局メンバーに入った俺と一緒に仕事をやる仲間だ。

「お疲れ様でした風間さん。初めての定例会議だったのにいろいろ助けて頂いてありがとうございました。」

「いいえ。俺事務局の仕事とかよくやっていますし、大体手順は同じだったので力になれて良かったです。」

「あ、風間さん。私に敬語を使わないで下さい。社歴も年齢も上方なのに申し訳ないです。」

「そうですね・・・それじゃ、吉田さんもう少しフラंकに接し

てくれない？せっかく同じ事務局のメンバーなんだし、お互い気楽にいこう？」

そう言われるも風間さんは俺より三つ上の二十八歳で少し気が引けてしまう。すると風間さんは俺の耳元に近づき内緒話でもするかのようにソツと囁きかけた。

「吉田さん、一人称「俺」でしょ？」

「へ！？」

「たまに堤課長とじゃれてる時「素」が出るよね？」

俺は仕事の中では自分の事を「私」という。社会人なんだし当たり前前つていえば当たり前なんだけどまさか「俺」って言ってる時があるとは・・・。「しかもよりによって課長という時だなんて・・・。俺は言葉につまり恥ずかしさを隠すようにして左手で自分の口を塞いだ。」

「俺も敬語はやめるからさ、吉田・・・君も敬語になっちゃうのは仕方ないとして、せめて一人称の「私」はやめて？」

「・・・分かりました。私・・・「俺」もそうします。」

「うん！じゃ、突然だけど今日の昼飯は新しい事務局メンバーの歓迎会なんてどう？」

「風間さん、自分で自分の歓迎会を開くんですか？」

「駄目？」

俺達はお互いの顔を見合わせ軽く微笑み合った。新しく入ったのが風間さんで良かった。頼れるお兄さんみたいな人でこれなら俺も仕事がやりやすい。何より他のプロジェクトでも何回か事務局を経験してるみたいだから色々勉強になる。俺が久川さんみたいになるにはまだまだ知識も経験も全然足りないから風間さんに沢山学ぼう。

そんな事を考えながら話していると不意に肩を叩かれた。

「光、飯行くぞ！」

「課長……」

「何？どうした？」

「堤課長！まだあたしの話は終わってないわよ！この要件定義の見直しだつてまだやってないんだから！」

「うるせーな。こっちはバタバタしっぱなしで昨日の夜から飯食つてねーんだよ！昼飯くらい静かに食わせる！それからでも十分間に合うだろ！」

課長昨日は帰りが遅くなるからつて一緒に帰れなかったけど……夕飯自分で食べなかつたんだ。そういえばシャツは昨日と違うけどネクタイが変わってない。もしかして会社に泊まつた？

「課長、昨日会社に……」

「課長昼ご飯行くの？あたしもご馳走様です。」

俺の声は久川さんの通つた声にかき消された。前の席に座っていた彼女の机は沢山の資料やファイルが散らばっていた。久川さんはそれをさっさと片付け始めた。

「おい百合、俺はお前と飯に行く約束もしてないしましては何で奢らなきゃなんだいんだよ。」

「あら、人にこんな面倒な仕事をやらせておいて何も報酬はなし？課長、世の中そんなに甘くなくてよ？」

「クツ……」

「報酬がプロジェクト終了まで毎日あたしに昼食を奢る位で済むんだから安いもんよ。」

「いつのまにそんな話になった……」

「たった今よ？」

久川さんは次々に資料を片付けていき、最後のファイルを鞆に押し込むとそれを軽々と肩に掛け課長に「早く」と急かす。

「どうせ「茜」に行くんでしょ？」

「茜」とは課長と俺が初めて昼食を食べ、それから毎日のように通っている居酒屋だ。どうして久川さんは課長がそこに行ってるって知ってるんだろうか？会社の同期っただけでこんなにも課長の事・・・分かってるんだろうか？さっきまで何とも無かったのに急に胸が苦しくなる。

「・・・・・・・・」

「課長あそこがお気に入りですもんね？」

「わーっただよ！ったく。光、行くぞ！」

「吉田君、今から行く「茜」はサバの味噌煮定食が一番美味しいんだから！」

課長と久川さんが俺をドアの向こうで手招きしている。「茜」のサバ味噌煮が旨いなんて・・・俺前から知ってるよ。今まで毎日課長と行ってたんだから・・・。課長も何で俺と行った事久川さんに喋らないんだよ・・・何で二人の「秘密の場所」みたいな言い方すんだよ。・・・。

課長と久川さんが一緒にいる所見るの、辛い。

「あ、あの！今日は風間さんと一緒に食べる約束をしてて！」

俺は二人に告げるとチラッと風間さんに視線を落とす。

「・・・・・・・・」

「あら、そうなの？じゃあ皆で行きましょう？」

「いえ！あの、事務局同士で今後の進行についても話をするので・・・今日は、すみません。」

「・・・課長！久川さんすみません！実は俺が昼飯に打ち合わせしたいって無理に言ってたんです。途中から事務局になったので色々聞きたい事もあったので。」

「それじゃ仕方ないわね。残念だけどまた今度ご飯食べましょう？」

「はい、ありがとうございます。」

「課長行くわよ！あたしは問題なく奢って頂きますからね！」

「・・・・・・・・」

課長は無言で俺を睨むようにジツと見ていた。俺はそんな課長を見るのが怖くて視線を逸らし二人を見送った。

「風間さん、ありがとうございました」

「え？」

「話を合わせてもらって。」

「あー、いいよ。俺もあの二人と食べるの大変だから断れてラッキーだったし。」

「大変？」

「そ。別に嫌ってる訳じゃないよ？結構前だけど吉田君の会社で一番デカイプロジェクトがあつてさ、その時もあの二人が責任者と副責任者やって俺が事務局だった時があつて。で、今日みたいに飯食べに言ったんだけど・・・なんかもう、目の前で喧嘩おっぱじめちゃって・・・。」

「はあ・・・」

目に見える様に簡単に想像できる・・・。あの二人所構わず喧嘩やり始めるから宥める方はさぞや大変だったに違いない。

「ほら、言っじゃん。喧嘩するほど仲が良いって・・・本当あんな感じなんだよね。三〇分位するとお互い喧嘩の事ケロッとして忘れてんの。長年連れ添った夫婦みたいな感じでさ。見てることうちが恥ずかしくなって。」

.....

風間さんの言葉が胸に刺さる。「長年連れ添った夫婦」・・・確かにそう見られてもおかしくないほど課長と久川さんは犬猿の仲に見えて実は仲が良い。その証拠が課長の久川さんに対する「百合」という呼び方からも見て取れる。課長さつき凄い睨んでた・・・でも俺二人の仲良い姿をこれ以上傍で見ていたくなかった。

このプロジェクトのシステム入れ替えまであと一ヶ月。あの二人が一緒にいる姿をあと何回見て、耐えなければならぬんだらうか・・・。

俺は両手に抱えた資料の持つ手を震えさせながら、課長達がが出て行った扉を見つめ続けた。

12 嫉妬（後書き）

お久しぶりです！花咲です！今回も調子が良いです！早めに更新できて嬉しいです。

今回も光君はモンモンと悩んでおります。そして風間さん登場ー！！イケメンリーマンです。新キャラが二人登場してどんどん話も進みます。そしてそろそろエロも書きたい！（笑）・・・頑張ります。

今回は10月の第1週の更新予定でいます。お楽しみにです

13 残業をした夜1

「運命的」な出会いってあるんだろうか？

父さんと母さんは身分違いの大恋愛の後、周囲の反対を押し切って一緒になった。

当時父さんは旧家の貴族の跡取り、母さんは父さんの家からほど近いパン屋の娘だった。母さんの家の米を使った「米粉パン」は近所でも美味しいと評判の店で、時折年配のお年寄りや商品を多く購入してくれるお客さんには宅配サービスもやっていた。その時店の手伝いをしていた母が、父の住むお屋敷に度々パンを宅配をする様になり、いつの間にかお互い恋心が芽生えたらしい。

『お母さんね、お父さんとは住む世界が違うし絶対報われない恋だ
って思ってたの。』

母さんがそんな風に考えている事を知った父さんは、大学卒業後母さんを連れて駆け落ちをした。父二十二歳、母は十八歳の三月だった。実家の吉田家ではそれは大騒ぎになり、必死に二人の行方を搜索するも一向に足取りは掴めなかつたらしい。しかしその半年後、突如二人は実家に帰ってきた・・・母のお腹に俺を宿して。

『父さん・・・ある意味策士だね。』

『計画的って言ってほしいね。あのままズルズル実家にいたんじゃ、その内見合いでませられそうだったからな。』

『あたしもまさか高校の卒業式当日、お父さんと駆け落ちするとは思ってなかつたわ。』

『え、母さんにも駆け落ちする事伝えてなかったの!?!』

『母さんはおしゃべりだからな。誰かに知られたら台無しじゃないか。』

『あなた!』

『それに・・・絶対に僕と一緒に来るって信じてたから。当日言えは十分だろ?』

『司さん・・・』

『・・・俺、邪魔なら席外すけど?それとも二人は俺の入学式当日にワザとそのイチャついた姿を息子に見せびらかしてんの?』

『つまりだ・・・俺は誰に何と言われようと母さんと一緒にいたかった。光、お前も今日から大学生だ。今まで以上に沢山の出会いがあると思う。もしそんな風に思える相手に出会えたら・・・絶対に離すなよ。』

俺は二人のそんな話をハイハイと宥める様に聞いていた。だって十八歳になった今までですらそんな出会いがなかったのに、大学に入ったからといっていきなりそんな「運命的」な事あるはずないと思っていたからだ。その後の俺の大学生活はそこそこ充実して、彼女も出来た。でも、それが「運命的」なものとは思えなかったし、やっぱりそのうち別れた。それからしばらくして両親が他界し、恋愛する余裕すらなくなっていた。

「運命的」な出会い・・・それは「嫌い」から始まる出会いもあるんだらうか?

「吉田君、そろそろ終わりにする?」

システム稼動テストをしているマシンルームの机の書類を集めながら風間さんは俺に告げた。

「そうですね、もう九時ですし。それにしても風間さんが事務局に入ってくれたおかげで仕事が大分楽になりました。」

「俺は本当に雑用しかやってないよ。メインの仕事は吉田君に任せっきりだし。本当に仕事出来るね。俺が吉田君位の頃はまだこの仕事やらせてくれなかったよ。」

風間さんは数台のPCの電源を次々と落として歩き、帰宅の準備を始める。俺はまだ目の前の画面と睨みっこをしながら今日使用したデータのチェックを行う。

「俺の方こそ課長から強引に事務局メンバーに指名されたのでまだ右も左も分からない事だらけですよ。」

「またまたー、吉田君は本当に謙虚だね。あ、課長に今日の作業報告しに行こうか？」

「そうですね。今の時間なら喫煙ルームにいるはずですね。」

事務局は帰宅前今日の作業の進捗状況や、今後のスケジュールの打ち合わせも兼ねて課長に報告しに行く事が日課だ。今日は昼ご飯断って睨まれて以降、課長と一度も顔を会わなかったから正直気が重い。その後課長は久川さんと仲良くご飯でも食べに行つたんだろうと考えると苦しくて、風間さんの歓迎会で二人で行つた焼肉もあり喉を通らなかつた。出来れば今日はこのまま帰りたい……。そんな叶わぬ願いを抱きながら俺も帰る準備を進めた。

マシンルームの片付けも終わり、俺と風間さんは鞆を持って課長のいる喫煙ルームへ向かつた。そこにはタバコを銜えた久川さんと、

ジッポのライターで彼女のタバコに火を付けている課長の姿があった。・・・まただ、この気持ち。久川さんはただ火を付けてもらってるだけなのに、それが嫌で仕方がない。自分はいつからこんなに心の狭い人間になってしまったんだろうか？俺と風間さんが喫煙のルームのガラス窓からその様子を堂々と見ているにも関わらず、二人は一向に気づいていない。時折久川さんが課長の背中を叩いたり、そのお返しとばかりに課長は吸っていた煙を久川さんの顔にかけてりとその仲の良さは俺には耐えられない光景だった。

「うわー、いい年した大人が何やってんだか。」

「・・・そうですね。」

「さ、俺達邪魔者は報告して早く退散しますか。」

「・・・。」

「邪魔者」・・・その言葉にまた胸が痛くなる。そうだよ、傍から見ても二人は仲良く見えるんだし、この場合どう考えても「邪魔者」は俺だ。頭でそう考えていても心は納得していないみたいで・・・ただ痛い。

「失礼します。堤課長、今日の報告にきました。」

「ああ、ご苦労さん。」

俺と風間さんは課長の元へ行き、さっそく報告を始める。・・・早く帰りたい。課長はずっと俺の事を見てばかりで、風間さんには目もくれない。心なしか久川さんはそんな俺と課長を交互に見比べながらニヤニヤしているし・・・一体なんだってんだよ。

「・・・以上になります。」

「分かった、お疲れさん。明日も俺と百合は午前中ユーザーの会社に出かけるから何かあったら連絡して。」

「分かりました。それではこれで私と吉田さんは帰宅させて頂きませう。」

風間さんは俺に「出よう」と目で合図し、一緒に部屋の扉に向かって歩いた。

「あ、光だけ待った。ちょっと見たいデータあるからマシンルーム付き合つて。」

「え？」

「それじゃあ私も・・・」

「あー、すぐ終わるから大丈夫。戸締りしていくから鍵貸して？」

「・・・分かりました。それじゃ、吉田君また明日ね。今日焼肉屋で貰ったクーポン、近々誘うから空いてる日考えといてね。」

「あ、はい。お疲れ様でした。」

風間さんは笑顔でそう言うと課長にマシンルームの鍵を渡し部屋から出て行った。

「・・・行くぞ。」

「え？あつ！ちよつと課長!？」

「百合、お前も今日はもう帰れ。」

「はい。・・・あんたも大変ね。」

課長は眉間に皺を寄せ、苛々した口調で俺の腕を掴むと喫煙ルームに久川さんを残し三階のマシンルームへと向かった。俺は何でまた課長がそんなに怒っているのか分からなくて、到着したマシンルームの鍵を開けている課長の背中を見つめていた。

13 残業をした夜1（後書き）

お久しぶりです、花咲です！

今回は残業のお話です。夜のオフィスっていうだけで妙に色気を感じるのは私だけでしょうか？もっと詳しく書くと守衛室とか給湯室とかロッカールーム（笑）残念ながら今回は喫煙ルームです（泣）そして次回はマシナールームです！システム会社ならではのですね。是非とも堤課長には頑張って男をみせて欲しいものですね（笑）

そう！話は脱線しましたが次回更新は何と翌日の同時刻頃を予定しております！わー 珍しく早い お楽しみに！

14 残業をした夜2

「入れよ……。」

「あ、はい。」

課長は俺を部屋に入れると内側から鍵を閉めた。

「何で鍵閉めたんですか？」

「……………」

課長は何も答えてくれない。部屋の中は暗いままで、電気をつけようと思ってもスイッチが課長のすぐ隣にある為行きづらい。せめてもの救いは、俺の身長よりも大きい窓から入る無数のビルの明かりで、課長の顔がうつすらと見える事だ。

「あの、どのデータを見ますか？」

俺はさっきまで使っていたPCの電源を入れようとしたが、その手を課長の手で遮られた。

「か……ちよう？」

「……何で避けてんの？」

「あ、の……。」

「俺、何かした？」

課長は俺の手を再度掴み、自分の手を俺の指の間に絡ませギュッと強く握る。俺も反射的にその手をギュッと握り返してしまう。

そんな事されたら前に電車で同じように手を握られた事を思い

出して、心臓が跳ね上がる程ドキドキした。さっきまであんなに胸が痛かったのに、今は別の意味でドキドキして、痛い。二十畳ほどのマシンのルームの中で二人、窓から入るわずかな光を頼りに俺達は見つめ合った。握られた手は今も離してもらえず、俺と課長の僅かな距離を繋ぐ糸になる。

「手、離して下さい。」

「何で？」

「・・・手汗！かいてきたしっ！」

「ハハッ・・・色気ねえな！・・・でも駄目だ。」

「やだっ！離して！」

必死に手を振り払おうとするも、課長が強く握り締めているおかげで中々離れない。俺は手が繋がれたまま、背を向ける。

「何で避けてるのか言うまでこのままだぞー。」

「・・・課長の・・・バカ。」

「バカで結構。ほら光、こっち向け。」

「・・・。。。」

どうしたらこの手を離してくれるんだろう。

「光？」

課長が心配そうに俺を呼ぶ。・・・避けてる理由なんて言えるわけじゃないじゃないか。

久川さんと課長が一緒にいる所が見たくないだなんて。

自分でもよく分からない。何でこんなに胸が苦しいのか、シヨッ

クを受けているのか・・・泣きたくなるのか。

「光！」

課長は痺れを切らしたのか、俺の肩に手をかけ自分に向けさせようとすると、嫌嫌と俺も意地を張る。しばらくすると後ろからため息が聞こえ、俺はますます泣きたくなつた。

課長きつと呆れてる・・・俺、何がしたいんだろ。

「全く、光は気まぐれな猫だな。」

「!?!」

強引に腕を引かれ後ろから抱き閉められた。バランスを崩した俺の身体を課長は支えながら、そのまま背後にある机の上に俺ごと座らせた。・・・背中から聞こえる課長の心臓の音が、いやによく俺に響く。

「光、確保。」

「・・・確保つて。俺、動物じゃないです。」

「今の俺にはお前がシャム猫に見えるぞ・・・。」

「シャム猫・・・アハハッ」

俺は思わず声に出して笑ってしまった。課長がそんな事言うなんて思ってもみなかった。ツボに入ってしまったしばらく抱きしめられたその腕の中で笑っていると、少しだけ気が晴れた。俺は笑って涙が出た目を拭いながら首だけ課長を向いた。

「課長、少し疲れてただけで大丈夫です。事務局の人員が増えた事もあって、少し戸惑ってました。」

「本当か？」

「はい、本当です。」

俺はニツコリと「鉄壁の笑顔」を作った。課長と久川さんが一緒にいるのが嫌だなんて個人的な事、やっぱり言えない。それに、何でこんな気持ちになっっているの自分でも分からないのに課長を避けても・・・何の解決にもならないんじゃないか？

「・・・事務局な。あれは本当に悪かった。俺は踏ん張れば光だけでもいけると思ってただけど上層部連中がな・・・社歴がまだ短いからって心配になって保険かけたんだよ。」

「え？」

「つたく、平野代理が抜けたのは痛いけど、それ位で崩れるヤツなら俺は最初から事務局に指名したりはしねえっつーの。なあ？」

「・・・。」

嬉しい・・・。結果的には事務局メンバーは追加されたけれど、課長が俺の事そんな風に思ってくれていた事がただ嬉しかった。

「風間。アイツどう？」

「どうっ・・・て？」

「随分仲良さそうだけど？」

課長は急に拗ねた様な声で問いかけた。課長・・・もしかして妬いてる？

「風間さんは・・・頼れる兄貴的な存在ですね。仕事も出来ますし、今後の良い手本になります。」

「焼肉も今度行くし？」

「課長も食べたかったですか？それならそうと・・・。」

「馬鹿、お前。違うだろ。」

「え！？ふぁ・・・んんっ！」

強引に顎を持ち上げられ顔を後ろに向けられた瞬間唇を奪われた。それは少し強引で、甘える様なキスだった。チュッつと音を立てて重なった唇は前と同じで、タバコの匂いが微かにした。俺の身体は後ろから回る課長の腕に抱きしめられる。これではまるで籠の中の鳥になった気分だ。餌の代わりに課長の濃厚な口付けが何度も与えられ、俺もまた抗うことはせずにその甘い行為を受け止めた。

「んう、はふぁ・・・っんん！」

「今日は逃げないんだな。」

「あんん！・・・んあっ、んんっ・・・」

どうして俺はこの手を振り解く事が出来ないんだろう・・・その気になれば課長を突き飛ばして逃げる事だって出来るのに。少なくとも前までの俺だったら間違いなく抵抗して罵声の一つでも浴びせているはずだ。

「・・・何か、調子狂うな。」

「え！？わあっ！」

課長は抱きしめた俺の身体をくるっと向かい合わせにさせ、そのまま押し倒す様に覆いかぶさってくる。男二人が乗ってもビクともしない机に仰向けになり、目の前には少しだけ髪が乱れた課長が見える。

「・・・お前酔ってないよな？」

「何でそんな事・・・聞くんですか！」

「いや・・・抵抗しないから・・・嬉しい。」

「！？」

そう言った課長の顔は、暗くてよく見えないけど歯がゆい様な、照れた様な顔をしていた。課長はその表情を隠そうと、俺の首筋に顔を埋めしばらく動かなくなった。俺は耳元から聞こえる静かな息づかいを感じて、つられて自分の顔まで火照っていくのを感じた。いつもなら絶対に見れないであろう課長のそんな表情を可愛と思うなんて……。でもこの顔を見せてくれた事が内心嬉しかったりする。ふと壁に掛けてある時計を見ると、いつの間にか針は十時をさしていた。

「……課長、そろそろ帰りませんか？」

俺は恐る恐る課長にそう告げると、課長も時計を見て少し残念そうな表情を浮かべた。

「……光、俺しばらくは家まで送ってやれないかも。」

「え？」

「平野代理が抜けただろ？百合が代役で入ったとはいえ、俺もいくつか引き継いだから残らないといけないからな。」

「そう……ですか。」

確かにこの所の課長の多忙さは尋常ではない。自席で仕事する事なんて滅多に無かったのに、今じゃ電話の受話器を肩に挟んだままPCに向かって作業をし、喫煙ルームにも日中の時間帯は忙しくて寄り付かなくなっているほどだ。

「寂しい？」

「別に！寂しくなんてありませんよ！前だって一人で帰ってたんですから！」

「そうか？俺は寂しいけど？」

課長は恥ずかしげもなく言う俺の手を取り、軽く手のひらに口付ける。あーもうっ！この人は外国人か！こっちが恥ずかしい！

「さ、いい加減行くか。優も飯作って光るの事首を長くして待つてらるだろうし。」

「・・・そうですね。」

課長は俺から身体を離すと部屋を出る身支度を始める。その時、ピロロロロと同時に俺と課長の携帯が音を出して鳴った。携帯を除くと優からメールが届いていた。

『二人とも遅い！早く帰ってこないとカレー僕が全部食べちゃうから！（怒）』

その文面を見て思わずクスツと笑みがこぼれた。あれ？二人？

「俺にも届いた。優にゴメンなって伝えて？」

「あ、はい。」

「お前ら兄弟は本当良い家族だな。」

「そうですか？ごく一般的な家庭ですよ？」

あ、でも両親は他界してるし普通とは少し違うの・・・カナ？

「いや、羨ましいよ。・・・ほら、行くぞ。」

俺と課長はマシンルームを後にした。ビルの一階まで見送ると言った課長を制し、エレベーター迄でいいと俺が言うと課長は渋々納得してエレベーターのボタンを押した。

「気をつけて帰れよ。知らない人にはついていくなよ?」

「・・・課長俺もう二十五歳ですよ?」

「光は妙に危なっかしいからな。酔っ払ったら絡んでくるし?」

「課長!?!?!」

「ハハッ。じゃあまた明日な、お疲れさん。」

「お疲れ様・・・でした。」

エレベーターのドアが次第に閉まり、課長の姿も見えなくなっていく。明日も会えるのに、今この別れが寂しいのは何でだろう?一階ボタンを押し扉に身体を預け、フウツとため息をつく。

「・・・課長・・・。」

身体はこの小さな箱によってどんどん下へと運ばれていく。

何も解決していない・・・。どうして課長と久川さんが一緒にいるのが嫌なのか・・・答えはまだ見つからない。

ついこの間まで嫌いだった課長の顔を思い浮かべる。

課長の事、今は嫌いじゃないけど・・・考えると胸が苦しくなる。

14 残業をした夜2 (後書き)

無事更新出来ました！花咲です！

今回は暗闇のマシンルームのお話でした。そしてここでもキス止まり……。寂しいです(笑)

本番(笑)まではまだまだ遠いです、はい。

次回は明日の昼頃の更新を予定しています。是非チェックしてみてくださいね！

では次回でお会いしましょう！

15 「安産祈願」の御守り

結局自宅に着いたのは夜の十一時前だった。最近では課長と一緒に帰宅するのが日課だったせいか、一人で電車に乗ると違和感を感じた。寂しくないなんて言っちゃったけど、電車で隣のつり革に掴まる課長の姿が見えなくて落ち着かなかった。

「ただいまー。」

玄関に入ると、真つ先に迎えに来る優の姿がない。俺はとりあえず二階に上がりスーツを脱いで部屋着に着替えた。次にリビングへ移動し遅めの夕食の準備をする。って言っても優が作ってくれたカレーを温めなおして冷蔵庫のサラダを出すだけなんだけど。ソファに腰掛け、まずはビールで喉の渴きを潤す。

「旨い……。」

俺は無言で食事に手をつけ、空腹を満たす作業を繰り返した。課長がいた時の煩いくらい賑やかだった光景が嘘みたいだ。・・・折角優が作ってくれた夕飯も今日は味気なく感じる。

「あ！光兄ちゃん帰ってきてたんだ。」

優が濡れたままの髪をタオルで拭きながらリビングに入ってきた。風呂に入っていたらしい。上半身裸で下はパジャマのズボンをはいた弟は、冷蔵庫から牛乳を出しコップにも次がずそのまま口に流し込む。

「優、行儀悪い。」

「えー。堤さんだつてやつてたよ？」

「あと服もちゃんと着て。風邪引くぞ。」

「だってー、こっちの方がカッコいいじゃん？」

「……。」

誰の影響だ……。まあ間違いなく課長だろうと思つけど。課長が我が家で夕食を食べる様になつてから優は課長の真似をしたがるようになった。それは服装だけでなく仕草や口調まで真似る程の徹底ぶりだ。それにしても……。どんなに仕草を真似ても容姿が全くついていってないのが笑える。小柄な体型と色白な肌。まだ成長途中だけあつて男性特有の体毛が一切見当たらない。逆にこれで胸があつたら間違いなくその辺の男達に声を掛けられる位に優は女顔なのだ。

「……兄ちゃん、お前の将来が心配になつてきた。」

「えー？何て言ったの？」

「別に。とりあえず外でその格好はすんなよ。」

「はい。」

優は元気よく返事をすると思つてラッパ飲みで牛乳を流し込む。その姿が課長が同じように牛乳を飲んでいる様に見えて、思わず笑みがこぼれた。……何考えてんだよ。さつきから課長課長つて！もう嫌だ！俺、病気なんじゃないか？しかめっ面でビールを飲む俺に優は首を傾げ、隣に座つて話し始める。

「聞いて兄ちゃん！ドッジボールの大会まであと一ヶ月なの！」

「……うん。」

「六年生達が相変わらず意地悪してきてね。」

「……うん。」

「この間なんかこつちが先に校庭使つてたのに、いきなり割り込ん

で「上級生に譲れ!」って言われたんだよ!？」

「……うん。」

「六年生だからって何であんなに威張るの!？」

「……うん。」

「……兄ちゃん？」

「……うん。」

「……もー!全然話聞いてないじゃんか!？」

俺の手に持っていたカレーを取り上げられてしまい、我にかえる。

「あ、ごめん優。」

「……兄ちゃんどうしたの？」

「え？」

「熱……はないみたいだし。疲れちゃったの？」

優は顔を近づけ、俺の額と自分の額をくっつけ熱の有無を確認した。

「……そうかも。でも寝れば直ぐに元気になるから。」

「本当?どつか痛いとか……辛いとかじゃなくて？」

「……うん、大丈夫だから。」

優はたまに凄い確信をついてくる時がある。これは俺の問題なんだから、優にまで心配かけさせる訳にはいかない。俺は課長にした「鉄壁の笑顔」を優に向け、笑いかける。しかし優はそんな俺の表情をじっと見つめると、小さくため息をついた。

「……兄ちゃん!今が正念場だよ!」

「え？」

「僕は兄ちゃんの味方だからね!!!」

優は手に持っていた牛乳パックを乱暴に机に置くとガシッと俺の両手を握った。俺は優が何を言おうとしてるのかサッパリ理解出来なくて混乱する。

「優!？」

「男には!やらなきゃならない時があるんだよ!」

「は?」

「僕がドッジボールで勝たなきゃいけない様に、兄ちゃんも「根性」出して頑張らないと!それが男ってヤツだよ!」

そう言い切ると優はソファから立ち上がりバタバタと二階へ走っていった。・・・なんなんだ?あいつ?勝手に一人で熱くなってるけど、大丈夫か?俺が優の奇妙な発言についてあれこれ考えていると、階段を下りる足音が聞こえて優がリビングに戻って来る。

「はい、コレ!貸したげる!」

「ん?」

優が俺の目の前に差し出したのは、「安産祈願」と書かれた赤い御守りだった。

「優・・・」

「僕の宝物だよ!」

「だって・・・これ・・・」

「そう!僕を産む時お母さんがお父さんから貰った御守り!」

父さんは俺達二人が産まれる前に神社に行き、母さんに安産祈願の御守りをプレゼントしていた。優が産まれる時には父さんと神社でどの色の御守りにするか一緒に悩んだ記憶もある。御守りの裏に

は母さんが黄色の糸で「吉田優」と手縫いされた、いわば両親の形見と言つていい代物でもある。

「これお前が母さんから貰った御守りだろ!？」

「良いから持つてて!」

「こんな大事なものを貰えないつて!!!」

「誰もあげるなんて言つてないでしょ!？いい?兄ちゃん。この御守りは貸すの!これ持つてれば元気になるから!!!」

「優……」

「兄ちゃんの御守りは誰かにあげちゃったんでしょ?だからさ……辛くても根性出して頑張つて!」

きつと優は自分なりに俺を勇気づけてくれてるんだと思う。自分の気持ちを溜め込んで何も言わない俺を感じて……。だから一番大事にしている御守りを貸してくれたんだ。そんな弟の気遣いは、俺の心に深くしみた。

「ありがと、優。じゃあ借りるね。それにしても……裏の優の文字、糸がほつれてる。」

「もう!別にいいでしょ!？」

「ゴメンゴメン。でも本当、大事にするね。」

「うん!」

満面の笑顔で返事をする優が可愛くて、頭をしばらく撫でてあげた。たった一人の俺の家族。そんな優を不安にさせた事が心苦しい。

「ごめんな、心配かけて。兄ちゃんもつとすっかりしなくちやな。」

柔らかくて、少し猫っ毛な髪をした弟は、撫でられて眠くなった

の目を手でゴシゴシと擦る仕草をさた。

「優、もう遅いから寝な？」

「うん・・・そうする・・・」

「おやすみ、優。」

「兄ちゃんおやすみなさい。」

ゆっくりと自分の部屋へ向かう優の姿を見送り、俺は食べかけのカレーを再度口にする。まさか優があのお守りを貸してくれるなんて思わなかった。きつとあれは俺の時と同じ様に、小学校入学に母さんが優に渡したものだろう。 当時俺も肌身離さず持っていたから。

俺のお守り・・・あの人今でも持っていてくれるかな？

俺も母さんから「吉田光」と名前が縫い付けられたお守りを貰った。俺を産んでいる最中に握っていたのか、少し折れ曲がった赤い「安産祈願」と書かれたお守り。それは今、俺は持っていない。

学校の帰り道に出会った背の高いお兄ちゃん。

初めて会ったお兄ちゃんにあげてしまった。

俺より、そ

の人の方が必要だと思ったから。

まあ何年も前の事だし、持ってるわけないか。

手の中の優のお守りを見て、当時の思い出が懐かしく甦る。

俺も落ち込んでないで、もっと「根性」出さないとない！！！！

立ち上がりヨシッと背伸びをし、気合いを入れ直した。

16 喧嘩兄ちゃんと御守り

『兄ちゃんも「根性」出せよな！一人だったら俺が「家族」になるしっ！もう寂しい思いもさせないからっ！！！』

あれは俺が小学校六年生だった頃

学校からの帰り道、いつも通る神社で一人の学生に出会った。彼は黒い学ランを着ていて、顔中に沢山の切り傷を作り神殿の傍のご神木に寄りかかっていた。樹齢何百年であろう大きなご神木は眩しい日差しがその学生に当たらない様に木陰を作り、優しく木々を揺らしていた。

神様に守られてるみたいだ

「ご神木に背を預けグッスリ眠るその姿を見て、恥ずかしげもなく俺は思った。だって、凄く綺麗だったから。俺は静かに鳥居を潜り彼にそっと近づいた。

あ、近くでみるとカッコいい

座っていても分かるスラッと伸びた足に、艶のある漆黒の黒髪。閉じた目元は睫毛が綺麗に揃って、それでいて顔つきは大人びて凛々しい……とにかく目が離せなかった。傷口が痛むのか、時折苦しそうな彼の顔を見ると何故か自分も胸が苦しくなった。

傷、痛いよね？

俺はランドセルを肩から外し、中からハンカチを取り出した。母さんが無理やり持たせる青いハンカチは、ランドセルに適当に突っ込んでおいた為グシャグシャに皺がついていた。

まだ血が出てるみたいだし、ないよりマシだよね。

俺は近くの公園でハンカチを水で濡らすと、それを握り締めながら神社に向かって走った。すると、彼のいたご神木から白い煙が見えた。

何！？もしかして家事？

急いでご神木まで戻ると、目を覚ました彼が呑気にタバコを吸っていた。俺の気配に気づくと、さっきまで安心して眠っていた顔とは想像も出来ない程怖い、威嚇した目で俺を見つめてきた。

『何お前？』

『あ・・・傷、痛そうだったから。』

そう言って濡れたハンカチを差し出すと、彼は鬱陶しそうに舌打ちをした。

『いらねーよ、そんなもん。つーかお前どっか行け、邪魔。』

『はあ？折角人が親切にしてやってんのに何だよその態度は！？』

『うつせーな。誰も頼んでなんかねーだろ！余計な事すんなー！！』

『！？』

コイツ嫌い！すっげー口悪いし性格最悪！！！！

俺は頭にきて持っていたハンカチをそいつに向かって投げ捨てた。

ザマーミロ！天罰だ！

よく水を絞りもしないで持ってきたハンカチは、見事彼の顔面と真ん中に当たり、顔全体が水でベチャベチャになっていった。やべ、しまった・・・っと思うもそれは後の祭りだ。彼は青筋を立て投げつけたハンカチを握り潰しそんな勢いで俺に迫っていた。

『クソガキ・・・やってくれんじゃねえか。』

『だって！・・・そっちが悪いんじゃないか！』

『ああ？』

『傷、痛そうだったし・・・バイ菌とか・・・入ると、大変だから・・・持って・・・きたのに。』

『・・・』

俺は消え入りそうな声でそう答えた。手当てしようと思ったただけなのに何で俺がこんな目に合わなくちゃなんないんだよ！？うつむき加減でジツと睨んでいると、彼は困ったような顔でまた舌打ちをして俺に言った。

『わーっただよ！だからそんな泣きそうな顔で見んな！』

『な！泣いてなんかないし！変なこというな！』

『じゃあこの真っ赤な目はなんだ？あ？』

彼は俺の顔を両手で押さえこむと、からかう様に俺の目を見つめた。その瞳は力強く、獣の様に鋭い目をしていた。

『ちよ！離せよ！』

『駄目ー。コレでもくらえ。』

フーっと俺に向けて彼はタバコの煙を吐いた。それは煙たくて目に染みる、俺にとって凶器そのものだった。

『ゴホツ！馬鹿！』

『馬鹿で結構。生憎出来た人間じゃないんでね。』

彼は気が済んだのかまたご神木背を預け、タバコの続きを吸い始めた。その姿はとても寂しそうで、そして悲しそうにも見えて、俺もまた彼の隣に腰掛けた。

『・・・お前、いつまでいんの？』

『いいじゃん、別に。あんたには関係ないだろ。』

『はいはい、勝手にしろ。ってか、目上の人間に対して「あんた」はないだろ？』

『・・・じゃあ、「おっさん」。』

『いい度胸してんじゃねーか、クソガキ。俺まだ十八歳なんだけど？』

『分かった・・・百歩譲って「兄ちゃん」で。』

『・・・まあ、それで許してやるか。』

『じゃあ俺の「クソガキ」もやめろよ。・・・に、「兄ちゃん」。』

まだ一人っ子で、上に兄弟がない俺にとって「兄ちゃん」は憧れの存在だった。だから一度は言ってみたくて、実際にその呼び方を言ってみると、思った以上に恥ずかしかった。

『クソガキはクソガキで十分だろ？』

『もう！意地悪！』

『ハハハツ。あ、そういやこれサンキューな。実は結構助かった。』

そう言つと兄ちゃんは俺のハンカチを顔の傷口に当て、血を拭き始めた。時折傷がしみるのか、痛そうな素振りをみせるも綺麗に洗い落としていった。

『喧嘩・・・してたの？』

『喧嘩とは言えねーな。・・・ただの暇潰しだ。』

『兄ちゃん、暇潰しで痛いことすんの？』

『俺だつて好きでこんな事してんじゃねーし、出来れば痛い事もしたくねーよ。でも昔から喧嘩やってたら、いつの間にかこれしかなくなつてた・・・』

『他にやりたい事、ないの？』

『やりたい事かー。何だろ、考えた事もなかったな。』

『家族に相談してみたら？』

『・・・家族なんていねーよ。俺施設育ちだし？』

『・・・』

兄ちゃんは軽く笑つて言つたけど、俺にはそれが「助けて」って言つてるみたいに聞こえた。まるで笑つていないと、そのうち涙が溢れちゃいそうな、悲しい声に聞こえた。

『俺・・・兄ちゃんがやりたい事、考える。』

『はあ？お前何言つてんの？』

『一緒に・・・考える。』

『考えるつたつてなあ・・・』

少し伸びた前髪を後ろに掻き上げ、兄ちゃんは二本目のタバコを吸い始めた。俺は一緒に考えるなんて言ったものの、良い考えがあるわけでもなく膝を抱えてご神木の緑を見つめていた。

『俺、さ。産まれてすぐ母親に施設に捨てられたんだよ。だから両

親の顔も知らねーし、知りたくもない。ガキン時から親無しでからかわれて・・・つい手が出ちまってそれからもう喧嘩ばっかしてた。高校は何とか入ったけどつまんねーし、サボってばっかで・・・気が付いたらもう三年だよ。周りからは厄介者扱いされてるし・・・俺自身、自分の人生・・・もうどうでも・・・いいって考えてて・・・

『・・・・・・・・』

『マジでやりたい事ねーし・・・このまま・・・腐った生活してくんじゃ・・・ねーの？』

『・・・・・・・・』

『どうせ俺が死んでも・・・誰も・・・困んねっ・・・だろ？』

『兄ちゃん！』

兄ちゃんは俯いて、静かに泣いていた。息を潜めるように呼吸をし、綺麗な涙を流した。

泣かないで、悲しまないで

今まで一人で頑張ってたんだね

一人で・・・寂しかったんだね

寂しくて・・・どうしようもなかったんだね

どうしてももっと早くこの人に出会えなかったんだらう？

傍にいてあげられなかったんだらう？

一緒に泣く事が出来なかったんだらう？

俺は兄ちゃんを抱きしめながら、次々に溢れてくる感情を抑える事が出来なかった。兄ちゃんの大きな身体を両手一杯に抱きしめると、砂の匂いがした。その匂いは兄ちゃんの乾ききった心みたいに見える・・・余計に涙が出た。

『俺、何クソガキ相手に泣いてんだろ？・・・ダッセ。』
『兄ちゃん・・・ヒック・・・ダサクなんっ・・・てない！・・・ヒック・・・』

『・・・。』
『さびしっ・・・ヒック・・・かった、だけ・・・ヒック・・・だよっ！』
『・・・サンキュ。』

兄ちゃんは俺を自分の腕の中に入れると、痛いくらいに抱きしめてくれた。抱きしめる力が強いのは、きつと寂しい気持ちも強かったからで・・・俺も兄ちゃんの首に掴まり力一杯しがみついた。

この人の為に俺が出来ること、ないかな？

それからいつまで抱き合っていたか分からない。明るかった景色も今は日が落ち始め、当たり一面茜色に染め上げていた。

『・・・あー、スッキリした。』

『兄ちゃん・・・』

『何年かぶりにこんな泣いて頭痛えよ。』

『俺も、ガンガンする。』

『お前は泣きすぎなんだよ。ピーピーうるせーし。』

『ピーピーなんて泣いてない！』

『はいはい。』

ヨシヨシと頭を撫でられ、俺はムスツと顔をしかめた。さっきまであんなに泣いていたのに・・・変なヤツ。でも兄ちゃんは少し元気になったみたいで、真っ直ぐとした目をしていた。

『暗くなってきたし帰るか。送ってく。』

『うん！』

それから俺達は神社を後にして、家に着くまでの間色々な話を話した。俺の家の家族構成や父さんと母さんが大恋愛の末結婚したこと。兄ちゃんは今一人暮らしで、バイトをしながら高校に通っている事など話は尽きなかった。

『じゃ、これで。つき合わせて悪かったな。』

『ううん・・・』

『ハンカチもありがとな。』

『うん・・・』

『じゃあな。』

『ま、待って!!--!!!--』

俺は家の前から去ろうとする兄ちゃんの学ランの袖を無意識に掴んでいた。

何か言わなくちゃ・・・何か・・・この人の為にしたい

慌ててランドセルを地面に下ろし、チャックのついた場所から目当てのモノを取り出すと兄ちゃんに渡した。

『兄ちゃんにあげる。』

『何?コレ。』

『御守り!』

『御守りだったって・・・これ「安産祈願」のやつじゃねーか。俺に子供産めってか?』

『違う!これは俺が産まれる前に父さんが母さんにあげた御守りなの!』

『それ大事なもんじゃねーか!?貰えねーって!』

『いいの!あげる!・・・母さんね、十八歳で俺を産んだの。』

『はあ！？十八！？今の俺と同じ年じゃねーか！？』
『そう！周りからは沢山反対されたみたいだったけど・・・それでも「根性」出して俺を産んだんだって。だから・・・』
『だから？』

頑張れって、負けるなって言わなきゃ。前を向いてほしいから・・・俺が傍にいるから大丈夫だよって

『兄ちゃんも「根性」出せよな！一人だったら俺が「家族」になるしっ！もう寂しい思いもさせないからっ！！！！』

十一年間生きてきた中で、一番緊張した。今日初めて会った人なのに、何でこんなに気になるのか分からないけれど・・・もうあんな悲しい泣き顔を見たくなかった。

『・・・それ、プロポーズ？』

『は？』

『いや、だって「家族」になるって。』

『へ！？いや、これはその！』

あれ！？俺何口走ってんの！？そういう意味で言ったんじゃないのに！？自分で言った言葉を回想しながら俺は恥ずかしくて、顔が火照っていくのを感じた。

『・・・いいぜ、約束。俺もお前の言う「根性」出して頑張る。俺が今よりもっとマトモな大人になったら・・・「家族」になれよ？』
『う、うん！』

兄ちゃんが楽しそうに笑う姿を見て、つい返事をしてしまった。でも別に嫌じゃないし、むしろ楽しみが増えたような感じに思えた。

『じゃ、この「安産祈願」はそれまで俺が預かっておく。いいな？』
『うん！』

『じゃあな！光！』

『!?!?!?! 頑張ってね！兄ちゃん！』

御守りの裏に書いてあった俺の名前の刺繍を見たのだろう。兄ちゃんは「ヒカル」と呼んで、茜色の夕日の中に溶けるように足早に去っていった。

兄ちゃん、負けるな

俺は兄ちゃんの姿が見えるまで大きく手を振って見送った。

その後兄ちゃんとは一度も会うことはなかった。

俺はまた直ぐにあの神社のご神木で会えると思っていたのに……次の日も、また次の日も……毎日待っていてても兄ちゃんは現れなかった。凄く悲しかったけど、最後に頑張るって言ってたから……きっと兄ちゃんは今もどこかで前を向いて頑張っているんだと思う。

いつかきつと、また会えるよね？

俺は今も、兄ちゃんは頑張っていると信じてる。

> i
3
2
7
7
1
—
3
7
4
7
<

16 喧嘩兄ちゃんと御守り（後書き）

・・・意外と早く更新が出来ました（笑）花咲です！

今回の話は光が十一歳の時の思い出になります。そして新キャラの学生が登場です。余談ですが私はブレザーより学ラン派です！普段あの黒い制服で隠された首筋の肌がエリのホックを外す事によって見え隠れするのが萌えます！（変態）それにしても始めはこの回想シーンは軽く流そうと思っていたのに、気がついたら4000文字超えてました。長くてすいません！

さて、次回からまた本編に戻ります！更新は多分また一週間後位になるかと思えます。お気に入り登録、評価入力もありがとございます！毎回加算される度、飛び上がりそうな勢いで喜んでいきます！！まだの方、お時間ありましたらお願いします。

それではまた次回をお楽しみにして下さいね！

17 子育てについて

「お母さんはね、光を十八歳で産んだのよ。高校を卒業してお父さんと駆け落ちしちゃって・・・それからすぐに光を授かったの。色んな人から反対されたけどお父さんがいない人生なんて考えられなかったし、何より光をこの手に抱きしめたかった。親から見離されたっていい・・・絶対に光を産みたかったの。そんな時、これをお父さんから貰ったの。」

「御守り?」

「そう、これはお母さんが無事に元気な光を産めますようにって、お父さんが買ってきてくれたのよ。」

「ふうん・・・でもこの御守りボロボロだね。」

「それはね、お母さんが光を産んでいる時ずっとこの御守りを握っていたからよ。」

「・・・痛かった?」

「うん。でも初めて光の顔を見たら・・・痛みも全部吹っ飛んじゃった。・・・この御守り、光にあげるね。」

「え?」

「この御守りはお母さんが「根性」出して頑張った証よ。どんなに辛くて痛くても、この御守りがあったから光を産むことが出来たのだから光も苦しいことがあっても諦めないで、この御守りを見て頑張るのよ?」

「・・・しだ・・・くん・・・。」

何? 凄く優しい・・・声が聞こえる・・・

「・・・よしだ・・・くん・・・吉田君・・・」
「うわあ!!」

ゴンツと机に額をぶつけた音で目が覚めた。あたりを見渡すとそこは十畳ほどのミーティングルームで、目の前には風間さんがニコニコと微笑んでいた。

「吉田君、大丈夫?」

「は、はい!・・・すみません・・・」

「最近忙しいからね。疲れちゃったかな?」

「いえっ!大丈夫です!」

・・・恥ずかしい。俺は赤くなった額を押さえながら消え去りたい気持ちで一杯になった。学生じゃないんだから・・・穴があったら入りたい。

「あんまり無理しちゃ駄目だよ?」

「はい、ありがとうございます。」

風間さん、何て優しい人なんだ。普通目の前で自分より社歴の短いヤツが居眠りしてたら罵声の一つでも飛んできてもいいものの、逆に体調を気遣ってくれた。俺は風間さんのくれた言葉を嬉しく思いながら止まっていた資料作成に戻った。

「でも良いもの見れちゃった。」

「え?」

「吉田君の寝顔。」

「!?!?」

風間さんは楽しそうにそう言うとPCのキーボードを鼻歌交じりに打ち始めた。・・・男の寝顔見てそんなに面白かったんだろっか？それともよつぼど酷い顔して眠っていたのか？まさかヨダレたらしてたとか！？俺は「しまった！」と自分の顔を両手で触りヨダレの形跡を確かめた。

「吉田君の寝顔見ていたら、うちの弟の小さい頃を思い出しちゃったよ。」

「風間さん、弟さんいるんですか？」

「うん、今年成人した大学二年の生意気な弟がね。」

「へえー、いいですね。俺も小学五年生の弟がいますよ。」

「え！？五年生！？・・・確か吉田君でござる親・・・」

よほどビックリしたのか風間さんのキーボードの打つ手が止まった。まあ・・・そりゃビックリするよね。俺の両親が他界した事は会社では結構知られているらしく、当初は周りの人達に家事について教わっていたから。おかげで今じゃ俺・・・じゃなくて弟の優が主婦も顔負けな完璧な家事をこなす様になっていた。

「そうです、四年前に亡くなりました。だから俺、こつ見えて子育てしてるんですよ？」

俺は得意げに話すと、風間さんは驚きの表情から一気に笑みをこぼし、声を上げて笑った。

「ごめんね？アハハツ・・・そうか・・・ハハツ・・・子育てか。何か納得した、だからそんなに落ち着いているんだね？」

「俺落ち着いてますか？」

確かに周りからは「動じない」とか「大人びている」とか言われ

てたけど、自分にとってはごく普通にしてるだけだから全然分らない。

「良い意味で「落ちついてる」なって思ったんだ。まだ二十五歳だよね？俺がそれぐらいの時はまだ大学生のノリで結構チャラチャラしてたからさ。」

「風間さんそんなに軽かったんですか？あんまり想像できないです。」

俺が知ってる風間さんは紳士的な大人で、どんな人に対しても分け隔てなく接するその場の空気の読める人だ。その彼がつい五年前迄チャラチャラだなんて・・・意外だ。

「ま、年月は人を変えるってやつかな？それより「子育て」はどう？うち両親忙しくて、弟は俺が育てた様なもんだから何でも聞いて？」

「何でもって・・・今の所そんなに困った事ないですよ？」

最近家事に関しては母親化して口うるさくはあるけど、別に嫌っていう程でもないし・・・むしろその必死に頑張っている姿が微笑ましいくらいだ。

「反抗期とか？」

「いや、たまに駄々こねますけど可愛いもんです。」

「んー・・・あーじゃあアレは？」

「アレ？」

「ほら、男なら誰しも一度は経験する・・・」

「一度は経験??？」

「そ、経験。」

「？」

「む・せ・い」
「!?!」

俺はビククリして机にまとめていた資料を床の上にバラバラと落としてしまった。

な、な!?!何!?!

『夢精』

一瞬自分の耳を疑った。大人な風間さんの口からそんな言葉が出るなんて!今夢精って言った!?!この人夢精って言ったよね!?!そりゃ男なら一度は経験する事かもしれないけど・・・ここで「夢精」の話題が出るとは思わなかった。

「か、風間さん!?!」

「別にそんなに驚く話でもないでしょ?」

「驚きます!?!」

「そう、子育てする人間にとっては避けて通れないことでしょ?」

「・・・まあ、確かに・・・」

俺も男だし、避けられない事も知ってる。でも自分が誰かに・・・しかも弟の優にこれがどういった事なのか教える時が来るなんてまだ考えてもみなかったのだ。

「俺なんて弟が初めて夢精した時、夜中にいきなりグショグショのパンツで叩き起こされたよ。」

「!?!?」

「アレって突然なっちゃうから、きっとビククリしたんだろうね。」

「……。」

き、気になる。ものすごく気になる！人様の夢精の事情なんて正直興味ないけど、風間さんが弟に何て言って説明したのかは凄く聞きたい。……今後の参考の為に。

「続き、気になる？」

「……はい。」

俺はコクコクと夢中で首を縦に頷き、風間さんの次の言葉を待った。風間さんはそんな俺を愛しい人を見るかの様にニッコリと微笑み頭を撫でた。

「よしよし、初めて俺に興味持ってくれたね？」

「え？」

「あー、こつちの話。で、続きだけど……」

「はい！」

「ほつといた。」

「へ？」

「『勝手にパンツ洗って寝ろ』って言った。」

「……。」

「だって真夜中に弟の精液ついたパンツで顔叩かれたんだよ！？いやー、もう腸わたが煮えくり返る位ムカついて。結局パンツと一緒に俺の部屋から追い出したよ。」

「……。」

「以上、おしまい。」

え！？おしまい！？もつとこう……この現象がどういったものなのか分かりやすく説明したり、驚く弟を何て言って慰めたのか……そういうのを期待してただけ……『パンツ洗って寝ろ』し

か言わなかったのか!?

「・・・それだけ・・・ですか?」

「うん。まあ俺もムカついて面倒見なかったのも悪いけど、本人が
らしたら恥ずかしいでしょ?ましては家族に知られるなんて。」

「そうですね・・・」

「だから何でもないフリして、夢精が病気とかそういう悪いことじ
やないって態度で示した。まー後は自分で友達に聞くなりネットと
か調べるなりして対処するでしょ。最近の子供は性知識が豊富だし
?」

「・・・。」

「どう?為になった?」

「うーん・・・何と、なく。」

「酷いなあ、結構いい子育て体験談だったのに。」

「はあ。」

まあ・・・人によって色々な教え方があるんだなあと思った。・
果たして自分が風間さんの様な対応を取るかは別として。

「で、吉田君はどうだったの?」

「!??」

「自分がアレしちゃった時。」

風間さんは机に頬杖をつき、ニヤニヤと意地悪な笑みを浮かべな
がら俺を見つめてきた。

「そんな事!言えるわけないじゃないですか!??」

「ええー!じゃあ俺の時の話するから教えてよ?」

「もう!別に聞きたくないです!ほら、仕事やりますよ。」

「あーあ、残念。」

するとバンツとミーティングルームの扉が開き、課長が物凄い剣幕な顔をして入ってきた。腕組みをし、いかにも怒ってますっていうのをアピールしているみたいに見えた。

17子育てについて（後書き）

お久しぶりです！花咲です！

今回のお話・・・15禁ばくないですか！？（笑）ところで夢精の話題事態は15禁なんでしょうか？そんな事を考えながら執筆しました・・・。

そしてこの回のタイトルも悩みました・・・ちなみに候補は・・・

「弟の夢精」

「夜中にパンツで起床」

「男同士の下ネタ談笑」

・・・こんな感じで考えてましたがあまりにもアホっぽいのでやめました。そしてネーミングセンスのない自分が情けなくなりました、はい。

夢精といえは（いい加減しつこいですか？）この話を執筆するにあたり色々な人の夢精事情について調べました。皆さん色々なエピソードをお持ちで非常に為になりました。これは今後の糧にさせていただきます。

最後になりましたが次回はなんと！明日更新します！短いですがお気に入りの話が出来ました！ここからかなりの急展開になりますのでどうぞお付き合い下さいませ。

それでは次回でお会いしましょう！

18 風間さんの気持ち

「何が残念だった？」

「課長。」

風間さんと話を打ち切りにしたかった俺にとって、課長の登場は嬉しいものだった。しかし課長は部屋に入り床に散乱した資料を見るなり何を思ったのか、ますます機嫌が悪くなり眉間の皺も深くなつていった。

「・・・お前ら明日の部会に提出するレビュー表出来てんの？」

「すみません、あと二時間程で完成する予定です。」

「遅えよ。風間、お前がついていながら何でこんな時間かかってんだよ。」

「申し訳ありません。」

課長は淡々と心を持たない人形の様言葉に言葉を並べ風間さんを追い詰める。その目は冷たくて、冷酷な目だった。

「課長、これは俺の責任です。風間さんは悪くな・・・」

「光は黙ってる。風間、お前光と一緒に仕事して浮かれてんじゃねーの？」

「は？課長何言っ・・・」

「いいよ、吉田君・・・私の力不足です。申し訳ありません。今しばらくお時間頂いてもよろしいでしょうか？」

「・・・一時間だ。お前が手伝えばそれ位で終わるだろ。」

「はい。」

「出来たら俺の所に持ってこい。資料室にいるから。」

「はい。」

課長は最後に俺のと視線を合わせると軽くため息を吐き、部屋から出て行った。

どうしてあんなに怒っていたんだろう……。それに風間さんに対してあんな事言うなんて……。いつもの課長らしくない。俺は冷たい課長の目が怖くて、その場に固まるしか出来なかった。

「あーあ、怒らせちゃった。」

「すみません、風間さん。俺の仕事が遅いばかりに怒られてしまつて……。」

「いや、多分……。あれは八つ当たりだね……。課長も可愛いところあるなあ。」

「え？」

「ああ、気にしないで……。それにしても自分だつて久川さんと散々イチャついてるクセに、吉田君が他の男と仲良くするのは気に入らないだなんて随分我が儘な話だよねえ？」

「？」

『吉田君が他の男と仲良くするのは気に入らない？我が儘？俺は風間さんが何を言っているのか理解出来ずに首を傾げた。』

「知ってる？課長と久川さん入社当時から仲良くして、いつだったか朝の出勤時会社の前で一緒にタクシーから下りてきたらしいんだよ。普通そんな目立つしないよね？しかも会社の人間が何人も見ているのに悪びれもせず堂々と出社してきたんだよ。そこからあの二人の恋人説が浮上したんだよね。」

「そう……。なんですか。」

……。聞きたくない。二人が仲良い事なんてもう十分過ぎる程思い知らされてるし、これ以上自分がみつともなく動揺したくない。

そう思っているのに、風間さんの話をしっかり聞きちゃってる。どうして課長の交友関係や、過去の話の一つ一つにこんなに傷つく自分がいるんだろう？

「気になる？」

「・・・いえ、別に・・・」

俺は何でもない振りをして床に落とした書類を次々と拾い上げる。気にならない訳じゃない、でも少しでも強がってないと深みにはまりそうで・・・怖い。

「・・・俺は気になるよ？」

「え？」

「吉田君の事が。」

その言葉の意味が分からず彼の方に振り返ると、不意に腕を掴まれた。その手は生暖かくて、妙にリアルに感じる。腕を掴まれた事で俺と風間さんの距離はぐっと縮まり、いつの間にかスーツ越しにお互いの体温を感じる程密着していた。

いや、密着と言うか・・・風間さんに抱きしめられたのだ。

「ちよっ、風間さん!？」

「なーんか気になっちやうんだよね、吉田君のこと。」

「ちよ、離して下さい!」

必死に抵抗するも、俺の片方の腕は風間さんに掴まれ、もう片方は書類の束を抱えている為思うように力が出ない。何より頭一つ分程高い身長差のせいで、風間さんの肩に顔を埋められ身動きが取れない。

「吉田君、いつも一生懸命に仕事してて・・・気になってたんだ。俺とは接点なかったけど・・・たまに同じフロアで見かけて・・・いい歳して目で追っちゃったりしてさ・・・」

「何言ってる・・・」

「黙ってる・・・だから事務局の話がきた時、予感してたんだよね・・・」

「風間さん!？」

「・・・めずらしく本気になりそうって。で、やっぱり好きになっただ。」

風間さんから言われた言葉を、上手く自分の中で処理しきれない。ただでさえ課長の事でこんなに頭をフル回転させているのに、そんな事言われても困る。すっかり硬直しきった俺の身体を、風間さんはギョツと軽く力を込め抱き寄せる。風間さんからは課長の様な夕バコのヤニ臭さはせず、代わりに爽やかで癖のない柑橘系の匂いがした。

「・・・俺、男です。」

「うん。・・・俺、男にしか興味持てない人間だから。」

「!？で、も・・・困ります。」

「俺も、困った。・・・もっと徐々に攻めていく予定だったんだけど・・・思わぬ強敵がいてね。君もまんざらでもなさそうだったし・・・ちよつと焦ってたんだ。」

「焦る?」

「・・・気づいてないの?」

「?」

風間さんは抱きしめていた手で俺の両肩を掴むと、目を丸くして驚いていた。その一瞬の隙に俺は彼の手を振り払い後ろの壁まで逃げる。・・・『気になる?』『目で追ってた?』『好き?』もはや

俺の脳内はパンク寸前だった。

「アハハッ！ そうなんだ！ 気づいてないんだ！」

「な、何の事ですか？」

「吉田君、結構鈍感なんだね。・・・じゃあ俺にもまだ望みはあるわけだ。」

「鈍感って何ですか！？ 風間さん失礼ですよ！！！」

「ハハハッ、ごめんね。でもこれだけは覚えといて？」

「何ですか？」

「俺は吉田君が好きだよ。」

「!?!？」

キラキラと眩しく爽やかな微笑みで告げる。多分うちの女性社員とかにしたら間違いないく落ちるだろうその笑みは・・・残念ながら男の俺に向けられていた。そんな顔で見られたら誰だって恥ずかしくなる。俺は風間さんから視線を逸らし、まだ床に散らかったままの書類に目を落とした。

「そんなに警戒しないで。今日は・・・悪かったけど、俺仕事とプライベートはきっちり分ける人間だから。・・・誰かさんと違って。」

「・・・。」

「さて、課長に提出するまで五十分しかない、頑張ろっか。」

「あ・・・はい。」

さっきまでの表情とは違い、仕事モードに入った風間さんは机に向かいPCの打ち込みを開始した。・・・何だか調子が狂う。俺、風間さんから好きって言われたんだよな？ でも今はそんな事が嘘みたい我真面目に仕事してて・・・どうしたらいいのか分からない。とりあえず俺は風間さんがこれ以上何もしてこないだろうと判断し、

やりかけの仕事に取り掛かった。

19 気づいた「気持ち」

あれから約一時間、俺と風間さんは何事もなく課長に提出するレビュー資料を作成した。いきなり好きだなんて言われてビックリしたけど、二人ともすっかり仕事モードに入り、それ以上深く話を突っ込むこともなかった。

何とか完成した資料を風間さんから無理言って預かり、課長のいる資料室へと俺は急いだ。部屋を出る前まで散々風間さんから「やっぱり俺が行く」と言われたが、元々これは俺が任されていた仕事だったし、何より先輩に持って行かせるなんてこと俺には出来なかった。

資料室は地下一階にあり、過去プログラミングした実績データや、それに費やした予算など実に沢山の資料がある。しかし最近ではその膨大な資料も全てデータ化され、自席で見れるようになった為、今じゃこの資料室はうちの課長が集中して仕事をしたい時に籠もる仕事部屋と化していた。

「失礼します。」

ギギツと重い扉を開け、俺は部屋の中に入った。窓一つない薄暗いこの部屋は、十メートル程の高さまで続く大きな本棚が綺麗に並べられていた。まるでこの部屋だけ図書館みたいだ。俺は棚と棚の狭い通路を一つ一つ除き課長の姿を探した。奥に入っていくにつれ小さな明かりが見え、その光を頼りに進むとPCのキーボードを打つカチカチという音も大きく聞こえた。

「課長、部会に提出するレビュー表をお持ちしました。」

課長は一番奥の通路で俺の身長より少し高い脚立に座り、本棚を

机代わりにしてデスクライトをつけながらPCを操作していた。

「ああ、お疲れさん。」

「・・・凄い所で仕事してますね。」

「まあな、でもここ人來なくて一番集中出来る。」

「そうですか。」

「あー、疲れた！光、その俺の上着にタバコ入ってるから投げて。」

「あ、はい。」

俺は棚にハンガーで掛けられた上着の内ポケットからタバコを見
つけ、脚立に座る課長に向かってそれを投げた。が、タバコはあと
少しの所で届かず床に落ちてしまった。

「下手くそ。」

「な！？次はちゃんと投げます！」

「いーよ、もう。俺が下りた方が早そうだ。」

意地悪そうに言うと、課長は脚立から下り拾ったタバコに火をつ
けた。さつきはあんなに不機嫌だったのに、今は美味そうにタバコ
ふかしている。課長が何を考えているのかよく分からない。俺のこ
と「気まぐれなシャム猫」って言うけど、自分だって相当な気まぐ
れじゃないか。

「・・・お待たせしていた資料です。」

「ああ、今チエックするからそこにいろ。」

三十枚程の綴りを一枚一枚めくり、課長は入念なチエックをする。
俺はよくこんな薄暗い場所でチエック出来るなあと思いつつ、黙
ってその様子を見ていた。

「よし、これで提出する。」

「ありがとうございます。」

「あとさ……お前、あんまり風間に関わるな。」

課長は俺から受け取った資料を棚に置き、煙を吐きながら言った。

「何で、ですか？」

「いいから……仕事だけの付き合いにしろっていつてんの。」

「いいからって……そんな理由にならないです。」

「理由？……そんな俺が気に入らないからに決まってるんだろ！」

資料室中に響く課長の声。まただ……さつき風間さんに八つ当たりしていた課長が今度は俺に向かって怒鳴り声を上げた。

何がそんなに気に入らないの!?

鋭い眼差しで俺を凝視する課長が怖い……でも怒ってる理由が分からなくて、納得いかなくて……俺は精一杯の勇気を振り絞って課長に反撃した。

「……気に入らないってっ!……そんなただの自分勝手じゃないですか!……それに!俺だっってっ……俺だっって!……」

駄目だ、ずっと抑えてたのに……我慢してきたのに……もう止まらない

「俺は課長の人形じゃない!何でもかんでもっ!……課長の思い通りにいくわけないでしょう!?!」

「光……」

「俺がつ！他の人・・・風間さんと仲良くしてたって・・・課長には関係ないでしょ!？」

俺は涙で潤んだ目を滲ませながら無我夢中で訴える。

「関係・・・ないだと？」

「そうです！関係ないです！だって課長・・・俺の親や兄弟とか・・・家族じゃないじゃないですか!？」

俺何言ってるの？こんなこと言いたくないのに・・・傷つけない・・・課長のこんな顔みたいわけじゃないのに！

課長は俺が言った言葉が信じられないのかその場で立ち尽くしていた。俺はついに涙で視界が見えなくなり、大きく瞬きをするとポタポタと涙が床に落ちていった。心臓はさつきからドクドクと大きな音を立て、これ以上ないほど緊張している。喧嘩なんてしたくないのに・・・傷つけないのに・・・こんなことしか言えないなら・・・いつそのこと俺の声を取り上げて欲しいと強く願った。

「家族・・・じゃない、か。」

「・・・ひつく・・・ヒツ・・・。」

「・・・確かにそうだな、俺はお前の家族でも何でもない。」

「・・・ウツ・・・ヒツク・・・。」

「・・・ただの上司だな。」

課長はいつものキレのある声とは正反対の、線の細い、独り言の様な小さな声で言った。

「光・・・俺の事・・・今までずっと迷惑だっと思ってた？」

「・・・ヒッ!・・・クッ・・・」

俺がいらなと思ったせいか・・・本当に声が出ない。嗚咽が出て、言葉を口にしようとすると呼吸が出来なくて・・・胸が苦しい。

迷惑なんかじゃない!迷惑なんかじゃ・・・俺は、ただ・・・

「・・・無言・・・って事はそれが答えか?」

「・・・ひっ・・・ヒック・・・」

「・・・分かった。・・・もうこれ以上しつこく付きまったりしねーから・・・悪かったな。」

「・・・ちっ・・・がうっ!・・・ヒック・・・」

「いいよ、無理すんな。・・・あともう喋んな・・・余計苦しくなるぞ。」

こんなに酷いことを言った俺を課長はよしよしと頭を撫でて落ち着かせようとしてくれる。声が出ない俺は必死で違うと首を振るも、撫でられるのが嫌だと思ったのか課長は手を離し自分の上着を掴んだ。

「・・・ボディガードもやめるな。優にはゴメンって謝っというて・・・

・・・ちよつと頭冷やしてくる。」

「・・・ヒッ!・・・ヒック・・・」

「・・・次からは「上司」として・・・よろしくな。」

「・・・かっ!・・・ちよっ・・・」

「・・・じゃあな、吉田。」

カツカツと靴音が遠ざかり、扉が閉まる音がした。誰もいない資料室は俺の嗚咽だけが響き渡った。

「・・・ウツ・・・ヒツ・・・クツ・・・」

俺は・・・ただ・・・

「・・・ヒック・・・ひっ・・・」

俺を見て・・・欲しかっただけだ

課長に「付き合わないか」って言われて、いつの間にか気になっていて・・・気がついたら目で追う様になってて・・・。課長が他の人と仲良くしているのが嫌で・・・。

涙で濡れた瞳を閉じると、風間さんが俺に言ってくれた言葉を思い出した。

『吉田君、いつも一生懸命に仕事してて・・・気になってたんだ。俺とは接点なかったけど・・・たまに同じフロアで見かけて・・・いい歳して目で追っちゃったりしてさ・・・』

気に・・・なる・・・？

『吉田君が好きだよ。』

好・・・き？・・・

バラバラだったパズルのピースがしつかりと当てはまっていくみたいだった。他の人が課長を呼ぶだけで反応するのも、俺の知らない所でなんの話をしているのか気になったのも・・・

「好き」だから・・・気になって、目で追ってたんだ

課長が久川さんと仲良くしているのが嫌で、その度に胸が苦しくなっていたのも・・・

「好き」だから・・・嫉妬してたんだ

今まで自分が悩んで、傷ついていたのは・・・「好き」だから・・・最初はあんなに嫌いだったのに・・・気が付いたら好きに変わった。

俺はデスクライトだけが灯るかすかな光の中、その場に座りこみ膝を抱える。涙は今も止まらなくて、何回も手で拭ってみても次々と溢れ出す。

「・・・ヒック・・・好・・・きっ・・・」

言葉にしてみるとそれは魔法みたいに心がポカポカと温かくなっ

た。
好き 好き 好き

課長が・・・好き。

でも、今更気づいても遅い。もう・・・手遅れだ。

『課長には関係ないでしょ!?!』

取り返しのつかない事を言ってしまった。きっと俺のこと・・・幻滅したと思う。悔やんでも悔やみきれないけれど、それだけ最低なことを俺は言ってしまったのだ。

『・・・次からは「上司」として・・・よろしくな。』

「好き」って言う前に・・・終わってしまった

いや、俺にはもう「好き」を言う資格すらない。今自分が出ることは・・・課長が誰か別の人と・・・久川さんと幸せになつてくれる事を願うだけだ。きつと、あの二人なら上手くいくと思う。そうだよ、課長元々女の子からモテるし・・・男の俺なんかより久川さんとちゃんと付き合つて、結婚して・・・子供作つて・・・

「・・・うつ・・・ふうえつ・・・うつ・・・」

今だけは泣こう。思いつきり泣くんだ。

俺が悪いんだから・・・けじめをつけるんだ。

次課長に会つた時・・・ただの上司と部下になれるように。

今のこの気持ちは・・・俺のずっとずっと奥深くにしまうんだ。

だから今だけは・・・泣いてもいいよね・・・

俺はやつと自覚した「好き」という感情に鍵をかける為、ただ泣き続けた。

20 課長の事情

自分の幸せはどうでもいいと思った。
いや、望んじやいけないと思った。

両親を失ったあの日、俺一人でも優をしつかり育てていくと心に誓ったから。それまで「優先順位」なんてものなかったけれど、頼れる人が誰もいなくなった今、優の事を一番に考えるようになった。

優が幸せなら俺も幸せ

もう、優以外大切な人はいない。

大切な人が増える程、失った時の悲しみも増えるって分かったから。

でもね課長、俺にとってあなたはいつの間にか大切な存在になってました。今更遅いですよね。自分でも笑っちゃいます。

好き。

課長の事好きっていう気持ちを認めたくなくて、否定し続けるばかりで・・・結局課長を傷つけてしまいました。

でも安心して下さい。もう絶対に傷つけたりしませんから。俺、課長の良い「部下」になろうって決めましたから。大丈夫、ちゃんと演じてみせます。課長の「幸せ」を望む「部下」にきつと頑張ってみせます。・・・こんな事であなを傷つけた償いになるとは思わ

ないけど・・・

せめて、「幸せ」を願う事くらいさせて下さい。

あの資料室の一件から一ヶ月が過ぎた。残暑の暑さもだいぶ落ち着いて、気がつけば会社前の街路樹の葉も黄色に色付き秋の訪れを知らせていた。時間は刻一刻と過ぎ、俺達が長い期間取り組んでいたプロジェクトもいよいよ来週プログラムの入れ替えを実施する事になった。俺と課長の関係はというと、始めの関係・・・「ただの上司と部下」に戻っていた。資料室で赤くなった目を元に戻るのを待って自席へ戻ると、斜め前の席には課長本人がいてさっきまでの事が嘘みたいに笑って電話をしていた。そして電話が終わりどんな態度を取れば良いのか分からなかった俺に課長はいつもの様に話しかけてくれた。でも・・・一つだけ今までと違う所があって俺はそれが一番シヨックだった。

『吉田』

課長は俺の事を「光」から「吉田」へと呼び方を変えていた。

これは課長が言っていた「上司として」のけじめなんだと思う。

その少し距離をおいた呼び方は、仕方ないと自分に言い聞かせても胸が苦しくて寂しいと感じた。しかし呼び方以外は本当に普段と同じで仕事の件で話をするとか真剣に話を聞いてくれるし、アドバイスだとしてしてくれる。それは仕事に私情を持ち込まないで専念したかった俺にとって有り難い事だった。課長は日があつにつれ仕事量も膨大に増え、日課だった喫煙ルームでの女性社員との座談会も時間がなくなつたみたいだ。忙しいのは久川さんも同じで、最近では課長の隣の席にPCを持ち込み常に一緒に行動を共にする様になった。

外に外出する時も一緒、社内にいる時も一緒とこれだけ近くにいるんだからもう・・・時間の問題かもしれない。俺の目の前では大抵喧嘩ばかりしているけどあれはじゃれてるだけで、本当はお互い良きパートナーに見える。

良いことじゃないか、これで二人が付き合えば俺も・・・嬉しいよ。課長が幸せになれるんだから・・・ちゃんと応援しなきゃ。

俺は自分にそう言い聞かせながら少し早めに仕事を切り上げ、今日も一人で会社を出てある場所へと向かった。

「吉田君、わざわざすまなかつたね。」

リビングへと続く扉を開けると、車椅子に座った平野代理が笑顔で出迎えてくれた。今日は先日骨折で病院から退院したばかりの平野代理のお宅へ会社を代表してお見舞いに来ていた。本来なら平野代理の直属の上司である堤課長が来るべきなんだけど、間近に迫ったプログラム入れ替えで手が空かず、他の人達も最後の性能テスト等で時間の折り合いがつかなかったので俺が急遽代表して行く事になったのだ。

「平野代理、その後足の様子はいかがですか？」

「見ての通り毎日苦勞しているよ。」

代理はそう言うと言った骨折した自分の左足を指差し苦笑いをした。確かにギブスでガチガチに固められたその足は日常生活するにはさぞや苦勞するだろう。事故から約二ヶ月経つがまだまだ仕事に復帰する事は困難だろう。

「リハビリはもう始めているんですか？」

「ああ、退院の一週間前ね。これがなかなか大変で・・・足が以外の筋肉に負担がかかってしまって筋肉痛で痛いよ。」

代理はソファに座るよう案内し、俺は腰を下ろした。課長の家は俺と同じ一軒家だが知り合いの建築デザイナーに内装を任せたらしく、モデルハウスみたいに綺麗で広々していた。アジアテイストを意識してか深みのある木材を使用した家具は一つ一つに存在感があり、お洒落なカフェにでも来た気分になる。

「仕事はどう？いきなり抜けてしまって本当に申し訳ない。」

「そんな！謝らないで下さい！今はお体を大事にする事だけ考えて下さい。それに仕事は課長が先陣きって上手くやっているので安心して下さい。」

「堤課長にも大変な役回りをさせてしまって・・・そう言えば吉田君、課長とは今も仲良く仕事してるの？」

突然課長の話題を降られて俺は手に持っていたコーヒークップを落としそうになり、慌てて両手で支えた。平野代理は今の俺と課長の事情なんて知るわけないから説明に困る。別に仲が悪くなったとかじゃないし・・・ちょっと距離を置かれてるかもしれないけど・・・。

「プロジェクトが始まった当初は吉田君課長の事あまり良く思っていなかったでしょう？内心大丈夫かかってヒヤヒヤしたけど私が入院する少し前には一緒に帰る位仲良くなってくれて本当に良かったよ。」

「ハ、ハハハ。でも最近は忙しくて一緒に変える事が出来なくなっちゃって・・・。」

「ああ、もうすぐ入れ替え本番だからね。・・・どう？課長いつも

軽い感じだけどころかなり仕事出来るでしょう。」

「そう・・・ですね。いつも喫煙ルームや他のフロアで遊んでいる姿ばかり見ていたのであんなに仕事が出来ると正直ビックリしました。」

そうなのだ、実は課長はかなり仕事が出来ると。今回事務局の仕事をして初めて知ったけど、課長は頭の回転が早く常に先の事を見越して物事を考えている。それに指示がいつもの確で人を動かすのも上手い。全ての行動に無駄がなく、それは俺がこの会社で将来理想とする人物像そのものだった。

「でも・・・だったら普段もあれ位仕事すればいいのにな・・・
思いました。」

「プツ、アハハハハツ！吉田君は
素直だね。でもね、課長はいつも皆が見ていない所で人の何倍も仕事しているんだよ？」

「・・・え？」

「うーん・・・何て言うか・・・課長のあの軽い態度はコミュニケーションの一部で、本当の顔は別にあるって事。」

「コミュニケーション・・・ですか？」

平野代理には悪いけど全然信用出来ない。確かに最近はずい仕事してるけど、その前までは毎日取り巻きの女性社員の所を転々と歩き回って自席にいる事の方が少かったのに！一体いつ仕事してるんだって思ったくらいだ。

「仕事をする上でコミュニケーションは重要だからね。それが大きなプロジェクトであれば尚更情報の連携が必要になる。」

「それは・・・そうですね。」

「だから課長日中は色んな社員と接する為に少しでも話が出来ると

うに歩き回って・・・もちろん仕事の話もするけど、大抵は相手のプライベートの悩みとか・・・まあ、世間話だよな。そうやって人の心を開いてくんだよ。」

「・・・」

「そうする事で皆課長に親近感を持っていつの間にか自分の仕事の些細な事も課長に話してくれて・・・結果課長も仕事やし易くなるんだ。」

「・・・」

・・・驚いた。ガサツな性格で面倒な事は嫌う人だと思っていたけれど、まさか仕事の為にそんな事をしているなんて考えてもみなかった。どおりで誰からも課長の陰口を聞かないはずだ。入社当時から課長は男女、そして上司部下問わず抜群の信頼があつてその理由がはつきりと分かった。

「でも話を聞くだけじゃ仕事に繋がりませんか？実際に業務をしないと・・・課長自席にいる事が少ないですよね？」

「ああ、それは皆の業務終了後からが彼の仕事時間だからね。今はPCがあれば大抵の業務が出来るから地下の資料室で籠って仕事してるんだよ。何でも人に見られて仕事するのがあまり好きじゃないらしい。周囲の視線や話し声で集中出来ないみたいだよ。」

平野代理はそう言った時の課長の顔を思い出したようでフツツと楽しそうに笑った。

「でもこんな事出来るのは課長くらいだよ。基本的にうちの会社情報が他に漏れない為に全ての仕事を社外に持ち出す事が禁止されてるでしょ？でも課長が役員に直談判して唯一持ち出しを許可されてるんだよ。」

「!？」

「だから多分土日も家で仕事してるんじゃないかな？・・・本当知らない所で仕事熱心というか・・・でもそれだけじゃないと思うんだけどね・・・。」

「え？」

「・・・彼、ずっと施設で育ってきて色々苦労してきたみたいだよ。今は一人で生活してるみたいだけど・・・きつと誰もいない家に帰るのが嫌でいつも理由をつけては会社に残ってるんじゃないかな？」

俺はコーヒークップを持つ手が震えた。そう言えば優が会社に書類を届けてくれた帰り「羨ましい」って言ってた・・・家に来た時も毎日飽きもせず俺と優の事を楽しませてくれて・・・。

もしかして・・・課長寂しくて・・・家に帰るのが嫌で残ってるの？・・・「家族」に対して相当な憧れを・・・持つてるんじゃないのか？

どうしよう・・・だとしたら俺、課長に最低な事言った。

『家族じゃないじゃないですか！』

もし、本当に課長が「家族」に憧れていたとしたら・・・どれだけ傷ついたことだろう？どんなに欲しくても手に入らなくて、ずっと願っていたもの・・・。俺は課長のそんな思いを否定したんだ。

「・・・吉田君？心ここにあらずって顔してるけど・・・大丈夫？」

「あ！？す、すいません！」

「あんなに仕事ばかりしてて・・・でも少し不器用な彼だからこそ、私は課長を尊敬しているんだよ。」

「はい・・・。」

今まで俺は課長の何を見ていたんだろう・・・上辺だけの課長を見て敵対視して、そこに隠れた本心を見る事が出来ていなかった。・・・だからあんな酷い事言って・・・傷つけちゃうんだ。

課長、どうして教えてくれなかったんですか？

短かったけど・・・でもいつも側にいた俺では・・・課長のそんな事情話すまでもなかったって事ですか？

違う・・・俺が「聞かなかった」んだ。

今頃になって課長の色々な話を聞いて、おれは改めて自分の不甲斐無さを思い知った。

ごめんなさい・・・何も気づけなくて。

ごめんなさい・・・いつも否定してばかりで。

ごめんなさい・・・傷つけてしまって。

ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・

課長は今何を思っているんだろう？こんな話聞いたら・・・折角課長の幸せを願うって決心した気持ちか・・・鍵をかけた心が開いてしまいそうだよ・・・。

俺は平野代理の話聞きながら、疼くこの気持ちを必死に抑えていた。

21 システム入れ替え当日！〜その1〜

「吉田！内線三番にCKKシステムから電話！」

「はい！ありがとうございます。」

俺は先輩にお礼を言うと、自分のデスクの受話器を取り保留を解除して話始めた。

「お待たせしました、吉田です……」

フロア中に響き渡る無数の電話の呼び出し音。受話器を置くとまた直ぐに鳴り出すその音に俺はいい加減嫌気がしてきた。いよいよ今日はプロジェクトのシステム入れ替え当日。銀行内の大規模なシステムを入れ替えるので、その作業は土曜の午前零時に実施される事になっている。ちなみに今は数時間前の金曜の午後三時過ぎ。俺は約九時間後に迫った本番を前に業者からの電話対応に追われていた。

全く、どいつもこいつもどうしてギリギリになって自分の会社の手順をまた聞いてくるんだよ！？俺先週全業者集めて詳しい工程表まで作って説明したよな！？……まあ今回はミスしたらその担当会社の名前に泥を塗りがねない事になるから慎重になるのも分かるけどさ……

俺は内心舌打ちをしながらこれからのタイムスケジュールを考えた。とりあえず課長と久川さんと俺達事務局が待機するデスクは出来たからボードに貼る工程表を印刷しないと……

「吉田君、工程表この大きさが良いよね？」

風間さんは息を切らしながらフロアに入って来ると、脇に抱えた大きな模造紙に印刷された工程表を俺に見せた。

「これちょうどボードの大きさとピッタリですね！ありがとうございます！」

「いえいえ、それより今日まだ休憩取ってないでしょ？昼出社だからって言ってもこれから忙しくなるから今のうちに軽く食べに行きた方がいいよ？逃したら夜中まで食べれなくなっちゃうから。」

「そうですね、じゃあこの工程表をボードに貼ったら休んできます。」

今日はシステムの入替えの為、俺は昼からの出社だった。ちなみに今日の業務終了予定時刻は明日の朝六時。今日は泊まりこみでの作業になるので、優には今日だけでも仲良くしてもらっている。友達の家にお世話になる事になっている。優は前々から言っていた「下克上ドッジ」が今日行われるらしく、その打ち上げもかねて遊べると楽しそうにしていた。俺は家に帰れないと言ったら少しは寂しがるかもなんて思ったけど・・・あまりにも聞き分けが悪くて俺の方が寂しくなってしまうた。優の事を考えながらボードにさっき貰った工程表を貼っているとちょうど直ぐ後ろから聞き覚えのある低い声がした。

「吉田、現地に行く警備員の最終チェック終わったか？」

「課長。はい、問題ありません。警備会社に届いた明細書の書式も新しいものでした。」

「そうか・・・あと、む。」

「はい」

「その・・・」

「？」

な、何だろ？課長が吃るなんて・・・俺何か失敗したか？いや、それだったら課長の性格上ハッキリ言うはずだし・・・もしかして、俺が実は課長の事好きなのバレた・・・とか！？

「お前・・・落とし物とか・・・貰ってたり、するか？」

「え？落とし物ですか？貰ってないですけど・・・俺何か落としましたか？」

「いや、それならいいんだ。変な事聞いて悪かったな。・・・それより優は元気か？」

「相変わらず元気ですよ。今日なんて学校でドッジボールの試合を上級生とするみたいで、朝俺に「ボコボコに叩きのめす！」とか言い捨てて登校しました。」

「アハハ。優も結構言うようになったな。」

「全く、誰に似たんだか・・・」

「まあ間違いなくお前だと思っけど・・・結構口悪いよな？」

「課長！！」

あれ？・・・俺今課長と前みたいに話せてないか？皮肉言っただけで・・・。課長はいつの間にか俺が持っていた工程表とマグネットを取り上げてボードに貼るのを手伝ってくれた。俺は凄く嬉しくて、このまま一緒にいたらなあなんて事を思った。すると、課長から少し離れた所から俺を呼ぶ声がした。

「ほら、吉田君！ここは課長が貼ってくれろみたいだし休憩行っちゃいなよ？そうですね、課長？」

「・・・俺だけでもここは出来るから早く行ってこい。」

「？・・・分かりました。じゃあお言葉に甘えて行ってきます。」

この二人・・・何だかお互いを牽制し合っているような。二人の

間に火花が見える気がするの俺だけか？

「あー！もう！今更何言ってるのよ！！！」

と、久川さんはガタツと椅子から立ち上がり持っていた受話器に向かつて大きな声で叫んだ。

「何っつっで！本番当日に時間をずらせとか言ってるのよ！こちとらあんたのハゲヅラみたいに簡単にズラせないっつーの！このバークードがっ！一回その頭スキャンしてやろうか！？」

その聞くに耐えない声はフロア中に響き周囲の度肝を抜いた。

「……百合。」

「……大丈夫よ。ちゃんと相手が電話切ってから言ってるから。」

「……そうか。その、ズラすとかの話は大丈夫なのか？」

「ええ、あっちには前倒しで動いてもらう事になったから。」

「分かった。……それから百合、タバコ吸って休憩してこい。」

「そ、そうですね！ここは私と課長がいますから……吉田君と久川さんは休憩どうぞ！」

「言われなくても行くわよ……あーあ、やっぱりヤニ切れは体に毒ね。余計ストレス溜まつちゃうわ。」

そう言うと彼女は机の上にあったタバコを掴み、踵の高いピンヒールをカツカツと鳴らしながらその場を後にした。

「……凄い。」

「……出た、久川さんの言葉攻め。吉田君、あんな風になっちゃ駄目だよ？」

「……え？は、はい。」

「あいつ本当ドSだな。あんなだから婚期逃すんだよ。・・・なあ風間？」

「・・・振らないで下さいよ課長。俺怖くて何も言えません。」

本番迄あと九時間。俺達は改めて久川さんの存在の大きさを思い知ったのだった。

21 システム入れ替え当日ーその1ー(後書き)

お待たせしましたー!!!いつもいつも更新が遅くてすみません・
・。今回はシステム入れ替え当日のお話です。その1ですのでこ
こから何話が続きます。いよいよ終わりに近づいてきた感じがして
少し嬉しいです どうぞ最後までお付き合い下さいませ!

あ、ちなみにプロフィールに載ってる私のブログへアクセスして
頂ければ更新情報をいち早くチェック出来ると思います。でも変態
ブログなので気をつけてください(笑)ではまた次回に!!!

22 システム入れ替え当日！〜その2〜

休憩を取るように言われて戻って来ると、時刻は午後四時になる
ところだった。俺は自分の席には戻らずに、先程自分で作っておい
た「プロジェクト統轄席」へと向かった。この席は今日だけ特別に
設置されたいわば特等席で、これから実施されるシステム入れ替え
を実施する際のいわば「監視席」だ。って言ってもこの席には俺、
課長、久川さん、風間さんの四人しか座らないんだけど。それぞ
れの役割は俺と風間さんで実際に作業する人達に手順の確認や完了報
告を受け、久川さんは協力会社のお偉いさんやユーザーである銀行
との緊急連絡と俺達の補助だ。ちなみに課長は基本的には何もしな
いで、俺たちの報告を受けながら全体の流れを把握して指揮を取る。
課長は「責任者は当日どつかり椅子に座って見守るだけ。俺がお前
らと同じ作業者になつちや意味ねえだろ」と先週の最後の作業手順
確認で言っていた。そういえば過去のプロジェクトでも常に課長は
「プロジェクト統轄席」に缶コーヒーとお茶を準備してその場から
一切動かなかった。多分前までの俺だったら「何皆が必死こいて働
いてんのに一人で呑気にコーヒー飲んでんだ」と思っていたと思う
けど今回は違う。先日平野代理から課長の本当の一面を聞いている
ので「これがこの人のやり方なんだ」と思った。でもよく考えたら
課長って本当不器用だと思う。一見要領良くこなしている様に見え
て、見えないところで一人で仕事抱え込んでるんだから。全く俺に
くらい・・・

俺に、くらい・・・手伝えて・・・言ってくれればいい
の・・・

「課長ー。今日徹夜ですよね？」

俺が席に着くと、喫煙ルームで見かけた事のある女性社員が隣に座っている課長宛に楽しそうに話しかけてきた。

「ああ。今日はシステム入れ替えだからな。」

「大変ですねー。ずっと眠れないんですね？」

「別に一晩位寝なくても人間死んだりしねーだろ。」

「でもせめてご飯だけはちゃんと食ないと・・・って事でコレ！」

「何？」

彼女は後ろ手に隠していた若い子が好みそうな洋服ブランドのシヨップ袋からお弁当箱を取り出した。

「じゃじゃーん！あたし課長の夜食作って来ちゃいました！ちなみに中身は手が汚れないようにサンドイッチですよー。」

「お前・・・これ大丈夫だろうな？本番中に食べて腹痛くなるのは勘弁だぞ。」

「ヒドイー！大丈夫ですって！あたしお昼に同じの食べて何ともなかったもん！」

「悪い悪い。じゃあこれありがたく貰っておきな。サンキュー。」

「後で感想聞かせて下さいね？今後の参考にしますからっ。」

そう含み笑いで言うと彼女は今にもスキップしそうな勢いでフロアから出ていった。

「やっぱり課長モテますね？あの子受付の子ですよね？」

「風間か。いや、あれは・・・違うだろ。」

「何変なところで謙虚になってるんですか？俺だつて一応モテる部類には入るはずなのに彼女課長意外眼中ない感じでしたよ。ねえ吉田君？」

「・・・・・・・・」

風間さんがいきなり俺に振ってきた。何だよ、俺に振られても困るよ……。課長が後ろに振り向き、一瞬だけ目が合う。しかしそれは気のせいだったみたいで課長は直ぐにパソコンの画面に視線を落とし、少しだけ眉間にシワを寄せた。

「吉田、イーネットからの進捗報告してねえぞ。」

「え？あつ！はい！すみません！もう社内に来ているはずなので様子見てきます。」

「ああ。」

俺は「しまった」と慌てて部屋の出口に向かって走り出した。課長の前を通り過ぎた際に小さく舌打ちをする音が聞こえた様な気がした。

風間は急いでフロアから出ていく吉田の姿見て、フツと軽く笑った。全く彼は本当にちょこちょこ動く。小動物……。いや主人に忠実な八千公と言ったほうがいいだろうか。しかしいくら忠実であったとしても、それが自分に対してでない面白くない。風間は隣に座る機嫌の悪い男の姿を盗み見る。

吉田君も何でこんな男に惹かれてるんだか。そりゃ外見・役職共に申し分ないだろうけど、いかんせん性格が悪いだろ

風間はつい先日自分が吉田に気持ち伝えた事を振り返った。流石にまだ知り合って間もなかったからいい返事を貰えるとは思ってなかったけれど、あそこまでビクリされると流石に落ち込む。一応出来る限り側において、アピールしていたつもりだったのに彼は全

く気づいてなかったのだ。

ま、これで少しは俺の事意識してくれたらいいんだけど

吉田の事を諦めたわけではない。むしろ俄然落としがいがあると闘志を燃やしていた。自分だってこの身長と甘い容姿をしているので課長に劣る事は決してないはずだ。だからこそ、諦めきれない。

吉田君、俺だったらもっと君の事大事にするのに・・・

風間は中学の頃にはもう自分が男にしか恋愛感情が持てない事を自覚していた。当時から女性にひっきりなしに告白されても全く嬉しくもなかったし、むしろ面倒だと思っていた。だから自分の恋愛の対象は女ではなく、男なのだと思った。しかし高校生になって何人が男と付き合い、身体の間係を結んでも幸福感を得られる事が出来なかった。女と身体を重ねる事はもっと嫌だったし、もう俺は誰かを好きとか一緒にいたいとかそういう感情が欠落してるんだと半ば諦めていた。

社会人になり、自分自身過去にそんな風に考えていた事さえ忘れていた矢先、吉田を見かけた。彼の第一印象はキレイな子だった。背筋が伸びていて、艶のある少し色素の薄い栗茶色の髪をなびかせてフロアを歩く姿に一瞬にして目を奪われた。

俺の人生で一目惚れする日がくるなんて・・・本当何が起こるか分からないよな

彼は覚えていないと思うが、一度だけ会社の何人かで飲みに行った事がある。そこで仕事熱心なこと、弟思いなところや、結構世話焼きな性格だったり酔うと甘ったれた口調になったりと彼の新しい一面を発見することに嬉しくて愛おしい気持ちになった。

彼を大事にしたい。出来ることなら側にいて、ずっと見守っていたい

自分の気持ちに気づくと彼の行動力は素早かった。吉田の加入しているプロジェクトで同僚が事務局として加入する話を聞くと、それまで受け持っていた全ての仕事を前倒しで片付け無理を言っ自分と代わってもらった。そして少しでも彼が俺の事を意識してくれる様に近づき、気持ちを打ち明けた。それなのに……

「俺じゃないんだもん。」

風間はため息を吐き、課長の二つ隣の自分の席へと座った。

「風間、何か問題でもあったか？」

堤はパソコンのキーボードを打つ手を止めると、隣にあった缶コーヒーを風間に向かって投げた。

「おおありですよ。……でも俺一人で片付けられます。」
「……そうか。」

風間は缶コーヒーを受け取り飲みはじめた。胃に悪そうなブラックの味は甘党の風間の口には合わなかった。しかし課長に対しての嫉妬心か、ここで飲むのやめるのも悔しいので一気に飲み干した。

まだ勝負はついていない。俺もスタートラインに立てたんだから、絶対に振り向かせてみせる

22 システム入れ替え当日！〜その2〜（後書き）

さてさて、いかがでしたでしょうか？今回は初の試みで風間視点で書いてみました！！この子が何をきっかけて光君の事を好きになつたのか掘り下げてみたくなつたんです。この話は当初書くつもりはなかったんですが、やっぱり書いて良かったです。前より風間と仲良くなった気がします（笑）

次回はまた・・・また一週間以内に更新出来たらなあと思ってます。
目指せ週一更新！！！！

ではまた次回もお付き合い下さいませ！

23 システム入れ替え当日ーその3ー

バタバタと階段を下りる音が響き渡る。下りては上り、また下りる。俺は協力会社の書類の引き渡しや、現状の進捗報告を聞く為に各階を行ったり来たりして走り回っていた。別に報告だけなら電話でやればいいんだけど、やたらと保留が長かったり話し中だったりして直接俺が出向いて聞いた方が全然早い。ちなみにうちの会社の協力会社は社内での携帯電話の使用は禁止されている。情報漏洩対策っていうのは分かるんだけど・・・出来れば今日位は使用を許可してくれてもいいのに。そんな訳で俺は遅めの昼食が消化しきれない身体に鞭を打ちながら階段ダッシュなんていう懐かしい事をしていた。

「ハッ！ハア！これで・・・とりあえず終わりつと・・・あ、甘くみてた。何でこんなっ・・・体なまってるんだ。」

膝から下がガクガク震える。一応中学から大学までテニス部だったから体力には自信があつたはずなのに。社会人になって身体を動かす機会がなくなるだけでこんなにもスタミナがなくなるなんて思わなかった。

俺、まだ二十代半ばなのに・・・既に衰えを感じるってどうなのよ？結構・・・シヨック。これから帰りは一駅前で下車して歩いて帰る

そんな事を真剣に考えながら喫煙ルームの前を歩いていると、見覚えのある漆黒のロングヘアの女性・・・久川さんが壁に寄りかかりながらタバコをくわえる姿が見えた。さっきまでの不機嫌な顔とは違い満面の笑みでタバコを吸う彼女は、普段吸う習慣がない俺か

ら見てもタバコの煙を美味しそうに吸い込んでいた。久川さんはガラス越しに俺の姿を見つけると「おいでおいで」と喫煙ルームへ手招きして呼んでいた。俺は左手にしていた時計を見て時間に余裕がある事を確かめると、喫煙ルームの扉を開け久川さんの方へ歩いた。

「おつつかれー。随分走り回ってたけど大丈夫？」

「お疲れ様です。事前作業も無事終わったので深夜作業までは落ち着きそうです。」

「そう。あ、吉田君もどう？」

久川さんは机の上に置いていたシガレットケースを渡してタバコをすすめるも、俺は丁重にお断りした。

「吉田君も吸わない人だったっけ？」

「はい、弟がまだ小学生なのであまり・・・」

「そっか。あー、まわりは皆禁煙者でどんどん肩身が狭くなってくるわ・・・。肺が黒くて何が悪いってのよ!」

「・・・」

「あたし達喫煙者はね、人より多く税金払ってんのよ?しかも自分の身体を犠牲にして!それなのに最近はこの店も禁煙禁煙って!吉田君もそう思わない?」

「アハハハ・・・」

俺は健康について考えてたのに・・・この人真逆の事考えてるよ。返答に困り愛想笑いをしてしていると、久川さんは口をへの字にして拗ねた子供の様な顔をした。その幼い仕草は可愛くて、いつもキビキビと指示を出す人と同一人物には思えない。そういえば久川さんて課長と同一年って言ってたけど結構童顔で、とても三十二歳には見えない。肌も白くて綺麗だし、ゴールドとブラウンのアイシャドウ、そして長い睫毛が一層彼女の美しさを引き立たせている。課長だっ

て・・・こんな美人に迫られて嫌なはずがない。俺は久川さんの容姿や仕草を見てまた少し落ち込んだ。

「ねえ吉田君・・・」

「はい？」

「・・・課長と何かあった？」

上目遣いでそう言うと、口の中にあつた煙を吐き出し短くなったタバコを灰皿へ捨てた。

「べ、別に・・・何もないですよ。」

「そう？何だか急に二人が他人行儀になつてる気がするんだけど・・・あたしの思い違いかしら？」

彼女はまるで全てを見透かした様な口調で俺に問いかけた。これじゃ俺が悪い事したみたいじゃないか。その態度に少し苛立ちを覚えるも何とか顔に出さない様、俺は返答する。

「そうです、気のせいですよ・・・多分。」

「フフフ。多分、ね。ま、あたしもあんまり他人の事に口出しするのは趣味じゃないんだけど・・・早くアイツの事何とかしなさいよ？」

そう言うと、新しくタバコを取り出しそれに火を付け始めた。

「アイツって・・・課長の事ですか？別に喧嘩とかそういうのでは・・・」

「あー、はいはい。あのね、吉田君の言い分をあたしが聞いたって意味ないでしょ？要は・・・ちゃんとぶつかりなさいって事。」

「ぶつかるって言っ・・・」

「あとは自分で考えなさい？全く！なんであたしが柄にもなくこんなお節介しなさいといけないのよ。あとほらっ！落とし物。」

久川さんは自分のジャケットの内ポケットから赤くて手のひらに収まる位の物を取り出し、俺に向かって投げた。

「え・・・これっ、て・・・」

「それ、吉田君の名前よね？今時自分の持ち物に名前を縫い付けるなんて随分物持ちが良いじゃない？」

え？何で・・・これって・・・

「・・・どこ、でこれを？」

「どっかってこの喫煙ルームに落ちてたのよ。・・・珍しい種類のもの持ってるのね。吉田君、子供でも産むの？」

クスクスと楽しそうに久川さんは笑っているけど、俺は手の中にあるコレがどうしてこんな所にあるのか信じられなくて上手く言葉が出てこない。

「それじゃ、確かに渡したわよ。お先にー。」

俺の肩をポンと軽く叩き、久川さんは喫煙ルームから出て行った。

「俺の名前・・・縫ってある・・・これ、あの時兄ちゃんにあげた・・・」

安産祈願の御守りだ

間違いない。御守りの裏に母さんが縫ってくれた俺の名前がある

し、何より兄ちゃんに渡すあの時まで俺が大事に持ってたんだから・
・絶対の間違うはずがない。でもどうしてこんな所にあるんだ？
落ちてたって・・・それって・・・まさか、ここに・・・

あの時の兄ちゃんがいるって事？

御神木に寄りかかって寝ていた兄ちゃん。

高校生なのにタバコばっか吸ってた兄ちゃん。

口が悪くて、小学生の俺にも容赦なくケンカ口調だった兄ちゃん。
顔中傷だらけで・・・寂しそうに胡座をかいてた兄ちゃん。

あの日、一緒になって・・・泣いた兄ちゃん。

「家族になれよ」って・・・俺に言った兄ちゃん。

あの時の記憶がフラッシュバックしてよみがえる。切なくて、懐
かしくて・・・また会いたいってずっと思ってた・・・会えなかった
兄ちゃん。

近くに・・・いるの？

一気に心拍数が早くなった。会えるなら・・・会いたい。・・何
話したらいいか分からないけど・・・

それでも、会いたい

そう思ったのと同時に俺の携帯のバイブレーションが震えた。自分が今仕事だという事を思い出し、携帯の画面を見ると課長の名前が表示されていた。

「はい、吉田です。．．はい．．．そうです。小学校からですか？
．はい．．え？．．優が．．救急車で運ばれた!？」

頭の中が真っ白になった。救急車？運ばれた？脳裏に浮かんだのは、優がいつものように俺を呼ぶ声だった。

兄ちゃん

23 システム入れ替え当日！〜その3〜（後書き）

お、お待たせしました（土下座）

最近ペース遅くて申し訳ないです！花咲です！

今回のお話いかがでしたでしょうか！？ようやく話が繋がっていく準備に入りました（笑）御守りがついに光の手に戻ってきましたね！これで話の種は全て撒き終わってるところです。今後どうなるのかご期待下さい！

そして気がつけばお気に入り登録の人数が60人を超えてました！ありがとうございます（涙）嬉しくて嬉しくてたまりません！今後ともお付き合いくださいます。頑張ります！

さて、今回は早いです（笑）12月5日迄には更新出来ると思いますので是非チェックしてみてください！

24 約束

『もう・・・父ちゃんと母ちゃんに・・・会えないの?・・・二人だけなの?』

両親の葬式は一日中雨が降っていた。家の前に飾られた花輪も雨に濡れ過ぎてくたびれてしまい、まるで俺の気持ちみたいだと思った。

ある日突然両親が死ぬなんてそんなドラマみたいな話、あるわけがないと思ってた。二人の結婚記念日に久しぶりに水入らずで旅行に出かけて・・・帰りに事故に合うだなんて。前の車が何台も玉突き事故に合い、両親もそれに巻き込まれて帰らぬ人となった。

いきなりいなくなるなんて・・・もう二度と会えないなんて思いなくなかった。俺は式中ずっと混乱していて、只々形式通りに進行していく通夜や告別式を他人事みたいに見ているだけだった。皆は俺の事を同情の眼差しで見つめるけれど、誰も救いの手を差し伸べてはくれない。親戚なんて両親が俺の妊娠の報告をしたきり絶縁したから誰も来ないし、これからどうなるかなんて全く分からなかった。

就職も内定して・・・これでやっと父さん達に楽させる事が出来ると思ってたのに・・・

葬儀も告別式も火葬も全て終わった今、俺は一人で祭壇の前に座り二人の遺影を見上げた。優の小学校入学式で正門前で撮った四人の家族写真。その父さんと母さんの幸せそうな顔が遺影として使う

ことになるなんて思わなかった。

静かに目を瞑る。

父さんの落ち着きのある低い声と、母さんの楽しそうに笑う声。

二人の声は今でも俺の中ではつきりと思い出せるのに・・・もう聞く事が出来ない。

「・・・クソツ！・・・何っで！・・・」

何でっ！！父さんと母さんなんだよ！！！！

膝の上の拳を握り締める。誰にも当たる事の出来ないこの憤りを、どう処理したらいいか分からない。握り締めた拳は爪が肉にくい込んで、ブルブルと震えていた。

「・・・おいて・・・くな、よな・・・知って、る・・・だろ？・・・俺、そんなんっ・・・つよっ・・・強く、ない・・・ってことっ・・・」

いつもどこか頼りない二人の面倒を見る、それが俺の役割だった。でも本当は少し不安で・・・相談して、背中を押してもらった。

そんな父さんと母さんにもう・・・会えない・・・

「・・・グスツ・・・うっ・・・クツ・・・もう会えないのかよっ！！」

今頃実感してきて、目頭が熱くなった。目に涙が溜まってきたのが分かって、瞬きをしたらポタポタと畳に落ちていく。

「に、ちゃ・・・」

振り返ると障子が少し開いていて、隙間から優がこちらをジッと見つめていた。涙を流しているその目は俺よりも赤く、顔をクシャクシャに歪ませてゆっくりと俺の前にやってきた。

「優、お前・・・寝たんじゃ・・・」

「グスツ・・・寝れないよ・・・静か、過ぎて・・・誰もいないみたつ・・・で、うえっ、ヤダよ!!」

「優・・・」

「もう・・・父ちゃんと母ちゃんに・・・会えないの?・・・二人だけなの?」

「・・・」

「そんなつ・・・の!グスツ・・・やだあー!!!!」

優は父さんと母さんの遺影に訴えかける様に大声で泣き続けた。

ここでいつもだったら母さんが優の泣き声を聞きつけて、パタパタと急ぎ足で来てくれた。そして「仕方ないわね」と甘えん坊な弟を泣き止むまで優しく抱きしめてくれた。

「うあああん!かーちゃあん!!かあちゃん!・・・ズズツ・・・かーちゃあつ!!!」

優はいつもみたいにもみたいに母さんが来ると思っているのか、ひたすら悲鳴みたいな泣き声を出して泣いていた。

でも優の待つ母さんの足音も、優しく抱きしめて包んでくれた温もりも・・・なくなってしまうた。

優、ゴメン・・・そんなつ・・・泣いても・・・俺母さんも父さ

んも・・・連れて来れないよ・・・

情けない 情けない

情けない 情けない

情けない

八歳の男の子・・・自分の第一人泣き止ませる事が出来ないなんて

俺はかける言葉が見つからなくて、優の両手をギュッと握った。

「ゴメン・・・ゴメンな・・・」

「・・・な、んで？・・・兄ちゃ・グスツ・・・謝んの？」

「優・・・ゆう・・・ゴメンな・・・」

「グスツ・・・兄ちゃん、悪く・・・ないじゃん・・・」

優だって、辛いんだ。

まだ八歳で・・・俺なんかよりまだまだ小さくて、一番父さんと母さんが必要なはずなのに・・・

・・・俺が優を守らないでどうすんだよ。

弱いかからとか、そういうんじゃない。

俺がやらなきゃ。

もう誰にも頼れない。誰も守ってくれない。

でも俺には優がいる。
優にだって・・・俺がいる。

まだ、一人じゃない。

俺は一つの決心を固め、優を力一杯に抱きしめた。

「優、よく聞いて?」

「グスツ・・・兄・・・ちゃん?」

「父さんと母さんはもういない。」

「ふえっ・・・ううっ!・・・」

「嫌か?」

「イヤにつ! 決まってるん・・・じゃん!!!」

「うん・・・兄ちゃんも・・・嫌だ。凄く辛くて悲しくて・・・泣きたい。」

「兄ちゃん、も?」

「そう。優と同じだ。」

「おな・・・じ?・・・」

「同じだよ。」

俺は自分の腕の中にあつた温かな身体を離し、背の小さな優の目の高さまでしゃがみ込む。優の肩に手をかけ、熱を計る時みたいにお互いの額をくっつけた。兄弟揃って目が真っ赤で・・・父さんと母さんの事が大好きな俺達。

「兄ちゃんは、優がいるから・・・父さんと母さんがいなくても・・・頑張る。」

「・・・僕がいるから・・・？」

「うん。」

「・・・父ちゃんと母ちゃんに・・・会えなくても？」

「うん。」

「ずっと会えなくても？」

「うん。・・・優がいるから頑張る。」

「僕がいるから・・・。」

「・・・優は・・・どう？」

俺達兄弟はお互いに視線を逸らさず、相手の気持ちを確かめ合う様に見つめ続けた。

「兄ちゃん・・・が、いるから・・・。」

「・・・。」

「・・・兄ちゃんがいるから！・・・グスツ・・・うえっ・・・僕・・・もっ・・・がんばるうう！！うえええっ！！！！」

優は俺に抱きつきながらそう言ってくれた。小さな弟がしてくれた大きな決心は、俺の心をさらに強くした。

大丈夫、優と二人なら頑張れる

俺は首にしがみついて泣く弟の背中を、母さんみたいにポンポンと優しく叩き、優が落ち着くのを待った。

「ありがとう、優。兄ちゃん嬉しい。」

「へへへっ」

「でも我慢するなよ？辛い時は兄ちゃんがいるんだから・・・俺と一緒に泣こうな？」

「一緒に？」

「当たり前だろ？兄ちゃんだって優と同じなんだから。」
「・・・うん！一緒だね！！一緒に泣こうね！！！！」
「ああ、じゃあ約束な。」
「うん！約束！」

そうして、俺と優は指きりをした。

父さん、母さん。

俺達二人は父さんと母さんに会えないとやっぱり寂しくて、これ
からも泣いてしまうと思う。

でも一人じゃないから・・・家族がいるから大丈夫。

負けないよ。

あ、でもたまには優の夢の中に遊びにきて？またまだ甘えたい年
頃だからさ。その時は・・・思いつきり抱きしめて甘やかしてやっ
て？

父さん、母さん。

俺達、あの家で頑張るから・・・だから、見守っててね。

優
・
・
・
優
・
・
・
優
・
・
・

俺、優がいないと頑張れないよ・
・
優がいたから頑張れたんだよ・
・
・

頼むから・
・
無事でいて・
・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5781v/>

吉田家長男の幸せ

2011年12月6日00時04分発行